
魔法少女リリカルなのは ~Destiny's Joker~

幻空 夢路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～Destiny's Joker～

【Nコード】

N3483V

【作者名】

幻空 夢路

【あらすじ】

それは運命か、あるいは偶然か、はたまたは必然か、それは誰も知らぬ。だが少年は少女と出会う。少年は願う、護る力を。少年は願う、自分が憧れる。仮面の戦士と光の巨人の力を。少年は願う、ハッピーエンドを……。

「魔法少女リリカルなのは ～Destiny's Joker～」
「始まります!!!!!!」

少し小説を改善します。ご迷惑おかけします。

ブログ どこだよこい(前書き)

はじめまして！幻空 夢路です！

初めての投稿なので誤字などが目立ったり、話がおかしかったりするかもしれませんが、そのことなどについても、アドバイス&感想よろしくお願いします。

プロローグ どこだよこい

ここは、なにもない、

あるのは砂と砂でできた丘、それもあまり大きいのではなく、まるで滅んでしまった世界かのような、いや、もしかしたらそうかも
しれない。そんな地に、

「……………どこだよこい……………」

少年^彼はいた、

いやいや、ちょっと待て。 たった今僕は海鳴市にいたはずだろ？
腹減ったからお菓子でも買おうかと思っただけで出かけてたら急にこんな
場所にいるってどうよ？ しかも気づいたのしばらく歩いてからだし、
どんだけ鈍いんだよ僕はってただのんきなだけか、アツハツハーっ
て笑ってる場合じゃなくて、ってあーもうなんかこんがらがってき
たー！ もーいい！ いいよね？ もう叫んじゃって！？ ハイ皆さんご一
緒にー！（誰もいないけど）……………不幸だ……………」

「ってほんとにどうしよ……………」

彼はとんでも思考終わると同時にハア、とため息をつきながらト
ポトポ歩き出す。

「しっかし何にもないなー、ホント。 まるで世界が滅びたみた
いに……………」

しばらく歩き続けたが見渡す限り砂だけであり、何もなし。この
まま歩いて無駄と判断し、歩きながら元の世界に戻る方法を考え

る。

(ハイパークロックアップか銀のオーロラ、
テレポーション、か？さてさてどれ使おうか……ん？)

怪訝な顔をしながらしばらくうーん、と思考を巡らせていると彼の目に一つのものが目に入る、それは

「建物……？」

この砂だらけの場所に建物が立っていたのだ、それは見た目からしてどうも研究所らしく、頑丈そうな壁に囲まれていた。

「おお！助かったー！と行きたい所だが、何でこんな場所に立ってんだい……？」

そもそも多くの者ならその建物が研究所らしい事や、頑丈な壁の事に気が付かないだろう。気付いたとしても気にしなかったり記憶のそばに置く、あるいは消すなどだろう。だが彼はのんk……少しかわt……かなり変わっているためそのことに気づく。また助かったもなにも元から変える手段はあるため、二重の意味で落ち着いていられる。

「行って、みようかな……？」

好奇心に駆られ、その研究所に向かう。

そのとき、彼は気付かなかった。自身の掛けているネックレスがまるで共鳴するかのよう輝いていたことを

~~~~~

来ててみたはいいものの、頑丈に作られていた壁に加え、嚴重な警備が施されていた。

「さて、どうしたもんかねえ……」

物陰に隠れながらうーんと少し考えるが、彼はすぐに結論を出す。それは、

「やっぱここは正面突破ッ!?!」

というどこぞのバトスピ大好き輝石のカードバトラーのような考え方の結論で正面突破になった(警備員に気づかれかけたが)。ただ、

「ほんじゃまあ、

クロツクアップッ!?!」

人間が認識できることのできないほどの速さ、

クロックアップでの正面突破に。

~~~~~

「………うわぁ」

クロックアップを使用し中に潜入したのはよかったものの、(途中、電子ロック的物があったがとある最強の電撃使いエレクトロマスターのやり方をまねて解除していった)潜入してからずいぶん中に来てからの感想がこれだ。それもそのはず、見てきた物が

「どう考えても違法な研究やってますと言ってるようなものばかりだもんねえ……」

もはや何かとしか言いようがない物が入った培養器やら、なにやらすごいようなコンピューターなどばかりである。

「マンガやアニメで出てきそうなもんばっかだし。ハッ、てことは僕はマンガかアニメの世界に来たのか!？」

それはありえない

「……なんか突っ込まれたような気が……、まあツッコミ役がないと1人ボケてても寂しいし、

さて、どうしようかこれ」

少し自分自身の雰囲気を変えながら一人問いただしたのは、この大きな扉。『危険』を意味するであろう絵がでかど描いてある。「見た目からも分かるほどかなり頑丈に作られてるよねこれ。壊すの大変そう、それに壊そうにも音とかで気づかれちゃ元も子もないし、……どうするか」

ふと扉の横にこの扉用の電子ロックであろうものがあったので、再びとある最強の電撃使用エレクトロマスターのやり方をまねて現在位置を調べるもかねて扉の解除をやってみる。

「今いる場所は……ほぼ中心、か。そしてこの扉の向こうがこの研究所の中心ね。しかも結構ロックがほかと比べて強力だし、

・・・ここが一番重要な場所って事かな？」

少し時間がかかりながらも扉のロックを解除し、中に踏み入る。
そこには

「What?.....」

思わず英語発音になりながらも

手足を壁に固定され、眠らされているであろう全裸の少女に自分の目を疑う

「ライライ冗談だろ？何でこんな女の子が.....」

思わず自分の言葉がおかしくなってしまう。それも当然だろう、自分と同じ年か、あるいは年下かもしれない少女が壁に固定されていたらお人好しの彼には十分衝撃だろう。さらに少女の顔には何度

も泣いたのである。う涙の後が顔にできている。

「…………今助けてやる」

そのまま右手にアグルブレードを作り上げ、固定具を斬り外す。

だがそれはある意味失敗だった

ウー！ウー！ウー！

「へ？」

『第一級レベル研究室にて拘束器具の破損あり！全警備員は速やかに研究室に行き、急遽Destiny's Childを捕獲せよ！繰り返す……………』

嚴重な部屋の物を壊せば、気付かれることは当然である。これはある意味失態だが、彼の性格を考えれば仕方ないのかもしれない。

「…………GOD DAMN」

「こちら、研究室にて不法侵入者を発見！繰り返す！こちら……………」

「…………不法って、あんたには言われたくないね」

いつの間にか現れた警備員の発言に思わずつぶやいてしまう。

「動くな！少しでも動けば撃つぞ！」

その言葉とともに前にいる警備員であろう者たちが一斉に杖を向ける。

「・・・・・・・・・・？」

なぜ撃つのに杖を向けてくるのか、魔法を知らない彼は謎に思っ
てしまう。

「さあ、おとなしく捕縛される！」

リーダーらしき男が彼にむかって叫ぶ。このときこの男は彼は素
直に捕縛されると思っていた、それも当然相手はまだ小学生のガキ
なのだから。

だがこの男の予想は覆される。

「やだね」

「なっ・・・・・・・・！」

「そもそも、おとなしく捕まったところであんたら僕を逃してくれ
るの？違つてしょ？」

「フ、フン、当たり前だ。ここの存在を知ったからにはおとなしく消えてもらう」

相手の回答に思わずうろたえてしまいが相手は冷静に対応してくるので男もすぐさま冷静になることができた。

「ハア……。ため息が出る、何でこーなのかねー大人ってのは？自分で言うのもあれだけど、子でもに武器？を向けてくるし、こんな小さい子供に泣くほど辛い事をやらせてたっばいし、たく。まっ、それが大人、か」

額に手を当て心底あきれたように首を横に振る。

ただ、その顔は憎しみと悲しみに覆われていたが。

「まいいや、ともかく僕はこの子を連れさせてもらうね、こんなところに置いとけないし」

「ハッ、この数で何をしようってんだ、ガキが！」

最初の男とは別の男がしゃべる。

「ガキ、ね……」

そのまま彼は自分の手を見る、

「最初に言っておくけど、あんたたちこの言葉知ってる？」

人は見た目に寄らない っ て言葉？」

「ほざけえッ！！」

男の言葉とともにリーダーらしき男が撃つよう命じる

れた

刹那、
彼らは光に包ま

ROYAL
STUDIO
FILMS

プロローグ どこだよここ(後書き)

謎が多かったり、主人公の力、名前など色々とかけてないかもしれないませんが、これは貯めです！貯めてから発表したほうがいいと思います、僕は。

次のプロローグ2ではぼすべての謎を発表します。

感想&アドバイス待っています。

ブローグ あなたは誰

それは突然だった。

今までは、何事もなく、ただ静かに、日々を送っていた……

・
・
・
そしてこれからも、そんな日々を送るはずだった………

・
・
・
・
ある日突然、私は白い服悪魔の者達に連れ去られた………

連れ去られた場所は最悪地獄だった……

日々、日々私の体に激痛が走った……

日々、日々私の頭はおかしくなりかけた……

日々、日々私の心は壊れかけた
.....

苦しくても、辛くても、そこへ

。痛い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
タイタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイ
タイ。

もういやだ

こんなのいやだ

どうして私がこんな目にあうの

・・・違う、

ちゃんと理由はある

それはこの力だ

この力のせいだ

望んだわけじゃない

欲しくて生まれたんじゃない

ただ持っていた、

世界の王にもなれる力を、

世界をも滅ぼす事もできる力を、

あまりにも大きすぎる力を、

あまりにもむちやくちやくすぎる力を、

私は持っていた

。

過去に似たようなことはあった

私の力を狙って散った命があった

滅びた世界もあった

いを呼ぶ

大きすぎる力は災

そんな類の言葉を聞いたことがある

まさにその通りだ

私はそれだ

だったら仕方ないのかもしれない

当然なのかもしれない

罰を受けるべきなのかもしれない

こんないやだ

もういやだ

自由になりたいッ

こんな力欲しくないッ

一人ぼっちはもういやだッ！

笑っていたいッ！！

誰かと一緒にいたいッ！！！！

幸せが欲しいッ！！！！

幸せを持つてる人たちみたいになりたいッ！！！！！！！！

だから、だから、

.....誰か

「助けてよ.....」

「

大丈夫」

突然聞こえた声に夢の中だった私の意識はすぐ覚^{覚める}醒する。

意識を覚ますと、すぐさま声の主を探す。

声の主は見た目の年は自分とはあまり変わらないであろうぐらいの少年がいた。

彼は少し驚いていたが、言葉を続ける。

「君はもう、助けられてるから、救われてるから、もう、心配しなくても大丈夫だよ」

優しく、暖かいその言葉に思わず気が緩みかけるが、頭をブンブン振り、この人を睨みつけ、問う。

「……………貴方は誰……………」

~~~~~

あの研究所をぶつ潰して、少女と共にあの場所からある程度の距離がある場所まで来たが、そこまで大変だった。

まずあの警備員をぶつ飛ばすためにかなり大きな力を使ってしまったため、研究所が崩れ始め、その研究所のデータを盗んで（何の研究をこの子にしていたのかを知るため）、脱出するのはかなり大変だった。

次にこの子の服だった。研究所に服になるものがあつたため（リリカルなのは force で第一話にリリイが着てたっぽいの）それを使ったのだが、あまり姿を見ず着せるのは大変だった。（変な事考えてないからね！）よく目が覚めなかつたもんだ、こちらはそれで助かつたが、・・・もしかしたら強力な睡眠薬かと思い調べたが、それではなく純粹に眠っていただけであつた。

そして今にいたる。

「どうしようかねー、いつまでもここに居るわけ行かないし、この子もなかなか目を覚まさないし、暇だ」

ゴロゴロと暇をもて遊んでいると、少女に動きがあつた。

「お、目が覚め

」

「助けてよ・・・・・・」

「・・・・・・」

たった一言、その言葉だけで、元からあまり音などなかったこの世界がさらに静まりかえるかのように感じてしまう。

その言葉があまりにも重く、悲しかったから

「大丈夫」

彼は思わず声をかけてしまう。その言葉に急に少女が目覚ます。

それに少し驚くが、それでも続ける、その言葉を

「君はもう、助けられてるから、救われてるから、もう、心配しなくても大丈夫だよ。」

その言葉に一瞬少女はポケーっとなっていたが、すぐ頭をブンブン振り、キツと睨み付けてくる。思わずその仕草がかわいく感じてしまう（変な意味じゃないぞ）。

「……………貴方は誰……………」

そう警戒心と敵意全力全開で問い、その行動に少し考え込む。

（ここまで警戒してくるなんてね、まあ、そこまで酷い事をされてきたんだろっからな……………）

そうなると色々と難しくなる、なにせ自分もやつらと同じ人間だ。警戒させないようにするのも難しいだろう。

「そう、だねえ……………」

とりあえず彼女の質問に答えることにする。

「誰って言われても、ぼくはただの通りすがりだからねえ、ただの  
t「それは嘘だよ……………」  
」

真っ向から否定された

「い、いや、そうはつきりと否定されると少し気ずつくんだけど、私の前にいる時点でただのはもうありえないもん」……………」

その言葉に目を細める。

そして、少女の目を見つめる。

美しく、綺麗なエメラルドグリーンの瞳、

そしてその瞳にうつる闇。

研究所での拘束、第一級、先ほどの少女の言葉、キーワードが繋がっていき、ひとつの答えが出る。

「要するに君は僕が君を狙ってきたと思ってるんだね？」

そう聞いた。

私はなにをやってるんだろう。

こんな人の相手なんかせず、すぐここから逃げだせばいいのに。

すると彼の目が細くなりじっと自分の目を見ってくる。私もじっと彼の眼を見つめる。

彼の眼はオッドアイだった。私から見て左が白、何色にも染まりそうもない、純粹で純白の白。右が黒、すべてを飲み込むような闇のような、だけど優しさを感じる真っ黒な黒。それが彼の眼だった。

そしてその眼には、

闇があつた。

（ 私と、同じ？ ううん、違う、闇の意味が違う。だ  
けど、その闇の深さは……………）

「要するに君は僕が君を狙ってきたと思ってるんだね？」

突然の発言に驚きながらも、自分の意思を理解した彼に答える。

「……………そう、そういうことだよ、あなたただで私の力を…」最初に  
言うておくけどさ、」……………」

いきなり言葉を遮られた。彼の顔をにらみつけるが、その顔はし  
てやったりと出てる。……………先ほどの恨みだろうか？

「僕が君の事を知っているのは、あそこに捕らえられてたことだけ  
だよ」

……………ハイ？

この白黒さんは一体何を言っているのだろうか？知らない？

「？」

少女の完全フリースの意味がよくわからず、彼は？マークを浮か  
べてしまう。

だとしたら、それはそれでいいのかも知れない、

「……………そ、知らん」そういや、君の名前って何なの？」…  
「…」

……………いい加減この人に切れていいだろうか？

何とか湧き起こる怒りを抑えながら、<sup>空</sup>上を見る。

「……………ラ……………」

「え？」

「ソラ……………私の名前はソラ……………」

「ソラ、か……………アレ？」

彼はそのまま<sup>空</sup>上を指す。

「……………そう……………」

そう少女は真実でも嘘でもない答えを出す。

(名前なんて……………考えたことなかったな……………)

ソラはそのまま<sup>空</sup>を見続ける。

「ソラちゃん、ね……………そういやね、」

ちょっと言いにくいけど、と付け加えながら彼は申し訳なさそうに聞く。

「君、何であんなところに捕まってたの？や、言いたくなくやいけど・・・」

ソラは無言のまま空を見続ける。その無言の時間がなぜか果てしなく、息苦しいものと彼は感じてしまう。タブーに触れちゃったかな？、と思いながら彼女にびくびくしながら待っていると、

「私の、・・・力のせい・・・」

重々しくだが、ソラは口を開く。

「・・・力？」

「そう、力」

世界をも滅ぼすほどのすごいの、ね。」

思わず眼を見開く。

その行為に少女はフツ、と力なく笑う

「驚いちゃった？こんな年もあまり行かない女の子がそんな力を持つてるなんて？」

冗談でも言ってるかのよつに、まったく空っぽの、何も無い、無  
と言つ表現しかできない表情で少女は言う。

しかし

(いやいや、冗談とも取れないし、年も行かない女の子って、言っ  
てられないでしょこりゃあ・・・)

とある学園都市最強の能力者、とあるグルメ時代の四天王や美食  
會や名の知れた美食屋、とある喫茶店の小太刀二刀御神流の後継者  
達、とある海賊時代の『覇氣』を扱う者達でさえ放つことのできな  
い雰囲気、それは決して殺気や怒気、覇氣などではない、ただ異常  
な雰囲気

ただし、それは正真正銘人ではない者が放つ異常な雰

困気。

（  
これでわかったよね……………）

少女は静かに思う。

（冗談とかではなく、本当に世界をも滅ぼす力を私は持っているんだって……………）

彼女の考えどおり、その異常な雰囲気であれば誰でも理解できるであろう。

（このまま慌てて逃げ出すか、綺麗ごと抜かして離れるか、さてどっちかな？）

彼女は知っている、人間はどこまでも汚く、どこまでも愚かである事を。

だからこそ少女は

(……………人間なんて、嫌い、愚かで、汚くて、そして欲望の塊。この人だってそうだよ、この人もほかのやつらと同じなんだから )

だが

「えー、あー」

「そのー、なに？その力って……一体どんなの？」

「……ハイ？」

「いや、だからその世界をも滅ぼす力ってどんなのかなーって思っ  
て。」

「い、いやいや、他に気にすることあるよ貴方！」

「えっ、何？」

「な、何つで素で……、怖くないの貴方！？こんな化物が  
目の前にいるのに、怖くないの！？」

「化物って、……ゴモラとかがっだたらカッコ良くない

「？」

「知らないから！ってゆーかゴモラって何！？」

「うんっ！！すごく良いツッコミ！やっぱボケにはツッコミがいなくちゃねー」

意味不明なことを言いながらうんうん一人うなずく少年にどんどんわけがわからなくなっってしまっ。

「何なの、貴方、何で怖がらないの「君が優しいから」……………ふえっ？」

今、この人はなんていった？優しい？どこからそんな

「まず最初に、」

考えてる途中でいきなりしゃべりだしたので思わずビクついてしまっ。

「優しくない相手だったらこんな見ず知らずの奴に丁寧に自己紹介とかしないし、」

二つ目に

「

……………この人、まるで私の考えを読んだかのように、

「自分の危険性とかを教えてくれてるから。そこから少なくとも、悪い奴ではないと判断できるね」

「……………」

「……………もうなんだかどうでも良くなってきた。」

「ああ、あと」

「……………何」

いい加減対応に疲れたのか、ゲンナリしながら彼を見る。

だが彼の言葉はその疲れを――

気に吹き飛ばすものだった。

「……………そろそろ、その狐の仮面、外したら？」

「……………えっ」

少し言いずらそうにしながらも、言葉を続ける。

同時にそれは私の中の何かを崩し始めた……………

「な、何を……………」

「化物とか、世界をも滅ぼすとか、そう君は君自身のことを言うてるけど、実際には違つてしょに？」

やめて

「・・・違う、私は化物」

「確かにそうなのかもしれないよ、だけど」

やめて

「厳密には違つだろ？」

「……違わなくなんか

」

「違つだろ？」

ちめっ

「それに世界を滅ぼす力があるなら

」

「やめてっ！！！」

今から彼の言うことは、おそらく彼女の幻想を殺すであろう。  
心の支え

だが、それでも言わなくてはいけない

人は時に、現実には耐え切れず幻想に逃げてしまう。それは彼女のような、人でなくとも心を持つものであればありえるであろう。彼はそのやり方について否定はしない。だが正しいとも思わない。

しかし、彼女の生きている幻想は逃げるためではない、その幻想の中で生き続ければ彼女は間違いなく

「なぜ、あの研究所から脱走しなかったの？」

「ツ！！！！」

彼は、彼女の瞳の闇を見た瞬間、わかったことがあった、それは、彼女は人間を信頼できない。なのになぜあの人間だらけの場所に彼女はいたのだろう、また、辛いことをさせられているはずなのに、なぜあそこにいたのか、力があるのに、それは

「君はその力を使うことができないんじゃないの？」

「……………そうだよ」

ぼそりとつぶやく。

「……………私はこの力を使うことができない、

私は、無力なの、私は、何もできないの！私はっ、抗うこともす  
らできないの！！」

彼女の生きる幻想、それは 自分のかげに自分ではどうにかできるとい  
う名義の強がりである。自分が狙われていて、それを自分ではどうにかできると勝  
手に決めつけているだけである。それではどうにもならない、逆に自分を傷つけ  
るだけである。

「……………気づいてたもん、最初から……………だけどっ、私は、何も、グスツ、できないっ。何もっ、ヒツクツ、できないっ……………！だからっ、ああするしかなかった！ああするしかっ、耐えれなかったからっ……………！」

少女は自分の愚かさ、無力さに自分を恥じ、自分を情けなく思う。そしてあまりの理不尽さに、涙を流す。

殺す。

だが英雄<sup>ヒーロー</sup>は、その幻想をもぶち

ポンッ

「??？」

自分の上に何か暖かいものを感じ顔を上げる、そこにいたのは

「そんな時は、誰かに頼れば良いんだよ」

まぶしい笑顔で自分の頭をなでてくる彼の姿が合った

「頼れって、それじゃあ貴方がっ！」

「言ったよね、大丈夫、君はもう、助けられてるから、救われるから、もう、心配しなくても大丈夫だよ。って」

「……………!」

「それにさ、何もなしに言ったわけでもないよ、僕にはちゃんと、護る力がある。」

それに、どうやって君を研究所から脱出

させたと思う?」

あつ、と間の抜けた声を出す。ずっと気になっていたこと、どうして自分はここにいるのかと言う疑問。そしてその答えが今の少女に示すものは

「……………ほんとに良いの」

「ん?」

「私が、貴方に

「ちょっと待って」

突然彼が言葉を遮る。

何事かと思い、彼が見ているところを見ようと立ち上がると、

「……………予感的中……………」

無理やり伏せさせられた。

「な、なにす」「どうやら相手はよほど君の事、じゃなくて君の力が欲しいみたい」

そして理解する、彼の行動の意味を。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴッ

その音と共にやってきたのは研究所によって作られたであろうソラの捕獲隊があった。

ものすごい兵器と共に。

「……戦車やら装甲車やら、なんかウルトラマンゼロの映画に出てきた時空揚陸舟艇デルスト見たいな物まであるんですけど」

「何でこんなに……あなた、心当たりある?」

「まあ、軽く研究所をつぶしたことぐらいしか……」

「それだよ!てか何て事してるの貴方!? まあ、半分が、それ以上は私だろうけど……。」

「僕があんだけやっというて君がいまだ半分以上占めるってドンだけ!?!」

思わず突っ込んだじゃったよ!仕方ないもん!など、言い合ってる

ウイーン ガチャンツ、ウイン ガチャツ

「「？」」

その音の元を見ていると。

「……………Transformers？」

「……………この世界ってマンガ？ううん、私が言えないか……………」

二人はトランスフォーマーのように変形した装甲車などに啞然と  
してしまふ。

「しかもトランスフォーマーの映画みたいにかなり凝った物だし、  
よく作ったなあ……………」

「感心してる場合じゃないよー！」

思わず彼がそのロボットに見とれてしまつてたため、ソラが慌て  
て注意する。

『そこにいる貴様ツ！すぐにDestiny Childを我々に  
渡せ！渡せば命ぐらいは助けてやっても良いぞツ！』

「……………とまあバレバレの嘘を言ってますね」

「ねえ、どつするのってちょっとー！」

突然、身を潜めていた彼が立ち上がり、ずかずかと捕獲隊に向かって歩き出す。止めた時にはもう遅く、すでに彼らの前に立っていた

「まったく、女の子一人のために軍顔負けの装備と人数で追いかけますか普通？それにはいどうぞって易々渡すわけないっしょ？」

「女の子？……なるほど、貴様は知らないのか！」

「？何を？」

「いいだろう、どうせ死ぬんだ教えてやろう。貴様が女の子といった奴はな、人間じゃないんだよ！」

その言葉にソラがビクンと反応する。少年は眉を顰める。

「そいつはな、人間ではなく

精霊なんだよ！」

「……精霊？」

「そう精霊だ、それもただの精霊じゃなくその頂点に立つ者、精霊王だ！」

「精、霊王……。」

彼は静かに後ろにいるソラを見る。彼女は縮こまるかのように身を抱き寄せている。

(精霊、よくファンタジーゲームとかであるよな、確かその精霊が水の精霊なら水の力を使えてって・・・)

「まさか彼女の力って・・・」

「そう、そいつは大自然の力を宿すのさ！まあ、本人はその力を使えないみたいだな。」

(だけど世界をも滅ぼす力って一体・・・)

「・・・聞くけど彼女は一体何の精霊？精霊は自然などの物から具現化した存在。なら彼女は・・・。」

「何だ聞いてないのか。そいつは星が具現化した存在だ」

「ブツ・・・！」

そのあっさりした言葉に心底驚いてしまう、なぜなら、星から具現化した存在となれば・・・

「わかるだろ？そいつは大自然そのものの力を秘めているんだよ！大地震、大嵐、大津波、火山の大噴火、はたまたにはビッグバン之力まで秘めてるんだ！ハハッ、どうだ！そいつのそいつの恐ろしさと重要さがわかっただろう！」

奴の言ったとおり、星が具現化したとなればそんな事を起こせる

かもしれない、だがそのほかにも地脈やマナなど神秘的な力もありえる。それ全てを司るにが彼女の力なら……

「まさしく世界をも滅ぼす力だね……」

彼はスッと眼を閉じる。

「さあ、分かったか！？、分かったならさっさとDestiny Childを渡せ！」

「……ああ、分かったよ。」

(ッ!!)

ソラは大きく目を開く

「  
絶対に前らみたいな変態クソヤロ  
ーどもに渡しちゃいけないことがねえッッ！！！！！！！！」

「なっ！」

「！」

その言葉に捕獲隊、ソラは衝撃を受ける。

「貴様っ・・・分かって言ってるのか!？」

「残念！僕はバカだけどアホじゃないんでねえ!!！」

「ッ！、バカめッ！全員、撃てえッ！！！」

全捕獲隊員が杖を、メカが発射準備に入る。ソラが後ろで何かを叫ぶ。そんな中、彼は目を閉じる。

たのは護る力

かつて少年がこの力を手にした時、願っ

戦士の能力と技

願った力は、自分が憧れる 仮面の

人の能力と技

願った力は、自分が憧れる 光の巨

願った武器は、傷つけるためではなく護るための武器、大きく、しっかりとした武器、決して負けないような武器、自分か、あるいは認められた物しか扱えぬ武器、そしてそれを判断する武器、

願ったサポートツールは、万能物、自

分の武器やさまざまな物を取り入れられるそのAIは赤き閃光の戦士  
とをサポートした者などのように、

そして彼は、その力を発揮する

「ウルトラシールド!」

迫りくる魔力弾を全て防ぐ。

「何い!」

「.....!」

ソラは彼のその技を見てあることに気づく。

(あの力って.....!)

そして目にする、彼が首から掛けている自分と同じ  
ネットクレスを。

「クッ、ためらわず撃てえ!いつまでも続けられないはずだ!」

そのまま捕獲隊は撃ち続ける。

「フウッ」

(ためらわず撃ち続けるって、そっちのほうでエネルギー切れになりそうだけど……、ただこのまま防いでばっかじゃ

)

チラリと後ろを見る。

後ろには心底驚いた様子で戦いを見ているソラがいた。

「

カツコがつかないしね!!

エクストリームッ

!!」

バツと彼は右腕を空に掲げる。何をしているのかと思いき多くの者が空を見上げると、

キュウイイイイイイイイッ

「あれは……デバイス?」

黒いメカニックな鳥が彼の頭上を飛んでいたのだ。不意に黒い鳥から小さな緑色の光は現れたと思うと、そこから彼の元に何か落

ちていく。危ない、と私は叫ぶ前に彼はそのままそれを、

キヤッチする。

(ドラグレッダーから龍騎にドラグセイバーが与えられる感じ)

「やっぱりじっくりくるねえ、」

キングラウザー!」

その剣は己の主に答えるかのようにキラリと輝く。

「さあて、最初っから最後まで、クライマックスだぜえッ!!」

変身ッ!!」

叫ぶと同時に、腰あたりから小さな金色の長方形が現れ、放出されながら回転と同時に巨大化し、それは光のゲートとなる。すると光のゲートは彼に自動的に後退して行き、そのまま彼はそれを通過する。そこには、王を表すかのような金色の服（鎧などが服になつたようなブレイド キングフォーム）を着た彼がいた。

「なっ、なんだ!？」

「服装が変わった、バリアジャケットか!？」

「だが何だ、この魔力の量!バリアジャケットを着けた瞬間急激に上昇したぞ!」

確保隊の者たちが、騒ぐ中、私は自分でも驚くほど冷静に状況を見ていた。

（確かにアレは魔力に似てるけど、非なる力でもある、けど一体・・・）

「バリアジャケットだかなんだか知らないけど、一気に決めさせてもらうぜ!？」

そんな中、彼はお構いなしに最強技の一つを放とうとする。

『Spade Ten』

『Spade Jack』

『Spade Queen』



「くらええええええつ!!」

「くらうか!」

服の紋章が一瞬輝く。

「ぐおっ!?!」

『バッファローマグネット』を使い、相手を斥力で吹き飛ばす。

「おい、大丈夫か!?!」

「あ、ああ、だが分かったぞ、やつは見た目どおりガキで、戦いも素人だ!優勢を保つてられるのも今のうちだ!」

「『オオオオツ!!』」

服の紋章の一つが一瞬輝く。

「『ぎゃああああああああつ!?!』」

威勢は良かったものの、放たれた『ディアーサンダー』により一気に撃退。

「どっちかつーと集団で来てもらうほうがこっちはやり易いんだけどね。うーん、だけど確かにこのままじゃまずいな、どうしたもんか……」

「貴方!」

「ん？っておおいっ！ソラちゃあああん！？」

隠れているはずのソラがいつの間にか近くに来ていたため、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「何してんの！危ないっしょ！早くどっかに隠れて！」

「大丈夫だよ！それより貴方、今の状態結構まずいんでしょ！？」

「まあ、そうなんだけど・・・」

「だったら、」

私と完全契約して！」

「・・・ファイ！？」

するとその言葉が聞こえた魔導師達がかなり焦りながら口々に言う。

「完全契約だと！？」

「バ、バカ！やめる！」

「・・・なんか色々やばそうなんだけど、まさか契約したら過去をあげなきゃいけないとか、魔女になるまで戦い続けるとかじゃないよ・・・？」

「ちがうもん！お互いデメリットのない契約だからこれ！」

それに男なのに魔女って……。いや、なんか急に頭に浮かんだんだ。などと話していると、完全契約の言葉を聞いて焦っていた魔導師達が再び一斉攻撃を仕掛ける。

「ゲツ、まず！ウルトラシールドで」

「完全契約したほうが効率が良いよ！私が唱えることを繰り返して！」

「だーっ！カーミー！分かったよ！やりやいいんでしょやりやあ！」

リント語が若干混ざりながら、自暴自棄に叫ぶ。

「赤き炎よ燃え上がれ」

「えーと？赤き炎よ燃え上がれ」

魔力弾が放たれる

「藍き水よ清らかに流れよ」

「えー、青き水よ清らかに流れよ」

数え切れないほどの魔力弾が上空に上がる

「黄色き雷よ凄まじく轟け」

「き、黄色き雷よ激しく轟け（ピカチュウが浮かぶ）汗（（（（」

魔力弾が降り注ごうとする

「蒼き風よ激しく吹き荒れろ」

「蒼き風よ激しく吹き荒れろ」

いくら完全契約を早くやっているとはいえ  
そろそろやばいため早口になる

「紫の地よ静かにうなれ」

「紫の地よ静かにうなれ（もしかしてこの色虹がもと？）」

魔力弾が迫り来る

「緑の草よしなやかにさざめけ」

「緑の草よしなやかにさざめけ」

そしてついに

「「輝く光よ邪悪なる闇をも打ち破るほど輝け！」」

無数の魔力弾が直撃する

《……………ねえ》

「……………ん？」

《実は……………あなたの力ってね、私から来てるの。  
このネットワークス、絆の証を介して、ね》

「……やっぱりそうなんだ」

《……気づいてたの?》

「僕が始めて力を得たのはさ、このネックレスをはじめて掛けたときからなんだよね。それに君が同じものをしてたから、もしかしたらってね。まあ、そう考えたのは君が精霊王の力を持っているって聞いた後だけだね」

《うん、絆これの証を介して私の半分くらいは貴方に送られてるから》

「星の力を半分……道理で制御しにくいはずだ」

《フフツ、特訓しなきゃね……あとね》

「ん?」

《私、自分の名前を言ったよね、》

「言ったね。」

《あれ、実は半分嘘でもあるの》

「……なんとなくそんな感じがしてた」

《ふふ、そっか》

「ちなみにもう半分は?」

《本当のこと。だって今日から私の名前はソラだもん》

「そっか、よかったね。」

少年は少女に優しく微笑む

「まあ、そろそろ帰ろっか。」

《うん、………ねえ》

「？今度は何」

《あのね、》

少女はいたずらっぽく笑いながら

問う

《あなたは誰？》

少年はちょっと驚きながらもクスツツと笑うと答える。

「僕は、通りすがりの小学生、左風 ショウだよ」

捕獲隊の魔導師や、援軍に來た者達を全て行動不能にし、全滅させた大自然の王は、光り輝く純白の翼を羽撃かせながら、帰るべき場所に帰る。

〈余談〉

ソラ「ねえ、シヨウ」

シヨウ「ん？」

ソラ「貴方私のネックレスを見たって行ってたよね」

シヨウ「うん、そうだけど？」

ソラ「研究所で私が全裸だったとき？」

シヨウ「そうそう、その時についてあ……」

ソラ プルプルプル

シヨウ「い、いやね！？あれは決して疚しい気持ちで

見たわけじゃないんだよ！？ちゃんと手で見れないようにしてたし！

まあ、ちよつとて言うかけっこー見ちゃったけどってあっ

ソラ「バカアーーーー！！！！！！」

シヨウ「ごぶはあっ！！」

## プロローグ あなたは誰（後書き）

後書き プロローグは完全に終わりました。そしてほとんどの謎も全て解けたと思います。一樣世界観はリリカルなのはなんですが、全然キャラクター出せてませんね（汗）。しかも時にシリアスのつもりがほぼシリアスになってますし（汗）ですが！次はほのぼのな上、出本編に突入します！

ご期待ください！

あと電王とまどマギは今のショウタチの世界ではまだ放送されていません。

面白そうだからかけたと言う作者の都合です。

リント語

現代語

「カーミー！」 〃 「あーもー！」

## キャラクター紹介

名前・ひだりかぜ左風 ショウ

日本人

年齢・不明  
(ジュースをこぼした後がある)

性別・男性

好きなもの・食い物（食えて味が悪くなくてもOK!）、  
仮面ライダーやウルトラマンなどの特撮物、マンガやアニメなど、  
家族、友人、仲間小さな子供、笑顔

嫌いなもの・悲しみの涙、笑顔を奪う者、争い、大人、自分の親

性格・基本のんきでのんびり屋

容姿・眼がオッドアイであり、右側が純白の白、左側が真っ黒な黒

髪の色は日本人らしく黒色）

無印編開始時）身長はクロノより少し大きい程度

顔立ちが良い、ただ女装などをすると……（ショウウ、ヲ  
イツー!?」）。

能力・仮面ライダーシリーズ、ウルトラマンシリーズの技・能力の多くを所持している。そのため、リンカーコアはないが、例えば、クウガのアマダムの力（封印エネルギーなど）、ファイズのフォトンブラッドの力、ブレイドのアンデッドの力、響鬼の清めの音や気などの力、電王の自身のオーラを変換させたフリーエネルギーの力、キバの魔皇力など、仮面ライダーの力多くを宿している。ウルトラマンの場合、光エネルギーを宿している。ただしこれらの力は別々の力ではなく、『一つの力が上記の力全て』であり、そのため、ブレイドの技を使えば、『ブレイドの力』だけが無くなるという訳ではなく、同一に全ての力がなくなる、言わば全ての力が融合したようなもの。

.....なんだかんだでむちゃくちゃな奴である。

だがこれらは、あくまでソラと契約したことにより得た星の力の半分から再現したものであり、仮面ライダー、ウルトラマンの技・能力だけではない（スーパー戦隊や、とあるシリーズ、そのほかetcの技が出る可能性も）。あくまで、星の力で仮面ライダー、ウルトラマンの技・能力を再現できるため、本人がそう使っているだけである。一見、便利を通り越してチートに見えるが、これらの能力には制限や限界がある。今後の物語でそれらは明かされていく。

技：仮面ライダーの技多く（銃撃以外）

ウルトラマンの技多く

武器：重醒剣 キングラウザー

キングラウザーを詳しくは [wikipedia](#) などで。オリジナルの性質に加え、本編では、他のライダー斬撃技にも対応するため他のライダーの剣の性質も持つ（例えば、電王の必殺技、一エクストリームスラッシュ（俺の必殺技パート2）の剣先を分離させ遠隔操作で敵を切り裂くと同じように、キングラウザーの剣先が分離する）。切れ味もすごいが、耐久力などの硬さもハンパない。

この剣には多少の自我意識があり（魔王剣ザンバットソードの様な）、もし、シヨウが、剣自体が認めた相手ではない者が使おうとしても使うことができない（持ち上げられないほど重くなったり、火傷する様な熱さになったりなど）。また、シヨウが暴走したりなどした場合、上記と同じことが起きるか、剣自体が暴れます。また剣を振り降ろしてもあたる直前に何かに弾かれた様に剣が吹っ飛ばすか、すり抜けるかである。自我意識があるため、剣自体がシヨウと離れた場所にある場合、シヨウが求めた時か、勝手にシヨウの手元に行く。その際、相手にぶつかってダメージを与える事もできる。この剣は、セブンのアイスラッガーのように投げて攻撃にも使え

る。ショウが操ることもできるが、剣自体の判断で飛ぶことができる。

### デバイス(?) : エクストリーム

仮面ライダーWで出てきたエクストリームメモリモデルの(一応)デバイス。エクストリームを詳しくはwikipediaなどで。人や物などを粒子化(デジタル化)して取り込むことができ、それを使って、ショウやソラの武器を内蔵・保管・運搬している。AIはエクストリームメモリとオートバシンのがモデル。言わば性格などはその二つが合体したようなもの。モデルのエクストリームメモリが単体でウエザー・ドープアント撤退させたほどの戦闘力を誇っている。エクストリームの戦闘力もそれ同等に強い。ちなみにだが、モデルとなったエクストリームメモリはサイクロン・ジョーカーメモリを取り込むことによって真価を発揮するため、エクストリームも似たような状態ではないかと思われる。地球の記憶と直結していたり、サイクロン・ジョーカーメモリの力を使える可能性がある。さらにエクストリームがモデル同様「謎が多い」や、「万能」を願って生み出されたものなので、所有者本人さえ知らないことができる。……ここまで来るとデバイスを超えたデバイスとなってしまう(汗)。

## 備考

本来は、どこにでもいるただのんきなだけの平凡な少年だったが、ある日、小さな次元震に巻き込まれ、研究所でソラと出会う。『絆の証』は自分の家に元から置いてあったものであり、たまたまそれが気に入ったから首につけたところ、星の力の半分を手にした。（本人は星の力だと知らなかったが）非常にのんきだが、それを逆手にとつて、いかなる状況でも落ち着いた判断ができる（なかなかそうは見えないが）。他人に影響を与えやすく、変わっていった人物は多い（ソラなど）。

実は、意外と悩みが多い。例えば、非常に鈍感なことやら（自称超鈍感帝王）。本気で切れると、前が見えなくなり、暴走に近い狂った状態になることや。小さな子供好きないか、ロリオンやらシヨタコンやらと呼ばれることなど（そのせいか、若干その気になつてきたらしく、またそれも悩みである）。

実は案外モテており、場合によれば、とある唯一EISが使える男や、ツンツン頭の不幸野郎に引けをとらない。

特撮ものやアニメ、マンガなどが大っ好きであり、小さい頃からまねたりしているため、癖やセリフを出すこともある。が、それは意識してのことであり、時に仮面ライダーなどでの名言などに近い言葉を言うが、それはあくまでシヨウが自分自身からの言葉である。

異常なまでに大人を嫌っており、これには過去の出来事に関係し、さらにこの暴走にはある意味があるのだが……、それはまた今度。

近距離、中距離、長距離と戦えるオールラウンダーだが、実際には接近戦を得意とする。また、持久力、耐久力が強く、本人も自信がある。

余談だが、じつは、容姿はとある人物に似ており、度々ネタにされている。

名前・ソラ

精霊王

年齢・不明（赤いマークが書かれて見えない）

性別・一応、女性（ソラ「一応って!?!」）

好きなもの・シヨウ、手料理（主にシヨウの）家族、友人、仲間、  
笑顔

嫌いなもの・悲しい涙、笑顔を奪う者、愚かな人間、争い

性格・落ち着いた性格であり、結構まじめ。

意外と子供っぽい？

容姿・はつきり言って美少女、それも十人中住人が振り向くほどの。シヨウにはもつたいたいほど（シヨウ「聞こえたぞ！」）身長はなのは達より少し小さい程度（若干気にしてる）顔は日本人だが、瞳の色はエメラルドグリーン、髪の色は桜のようなホワイトピンク。

能力・星の力を持つが、自分では使えなかった。使うには、『絆の証』で契約した契約者の助けが必要、契約した者には、星の力を与えることができる（シヨウとの場合は約半分個）。シヨウと契約したため、自身の星の力を使う事ができた。技・能力は特に決めていなかったが、シヨウの進めにより、仮面ライダー・ウルトラマンのを使用することにした。そのため彼女にもシヨウと同じ力が宿っている。だがシヨウ同様、能力には制限や限界がある。それらは同

じく今後の物語で明かしていく。

技：仮面ライダーの技・能力（銃撃・物理技のみ）ライダーキックなどを少し

ウルトラマンの技・能力を少し

武器：醒弓カリスアロー 醒鎌ワイルドスラッシュャー装着状態

詳細はWikipediaで。特性はシヨウのキンググラウザーと似たのを持つ。

デバイス(?)：エクストリーム

シヨウと合同で使っている。

## 備考

星の精霊王であり、非常に強大な力を秘めている。星が生まれた時、彼女も生まれており。生まれてからずっと一人で世界を旅してきた。その途中、彼女の強大な力を狙うものたちが次々と沸いてくるかのように現れ、つらい過去を生きてきた。自分の力のせいで滅んだ世界などがあり、その事から皮肉を込めて 化け物と自称していた。また、人間の闇をいやと言うほど見てきたため、人間をまったく言っていないほど信用していなかった。だが心のどこかで『絆の証』を手にし、自分と共にいてくれるような相手（運命の相手）を求めていた。そんな中、とある組織に捕まり、研究所に連れ去られていた。それからしばらく研究材料にさせられていると、『絆の証』を持ったシヨウ（運命の相手）と出会う。

シヨウの事は全面的に信頼している。  
そんな彼の影響もあってか、徐々に人間に対する見方も変わってきている。しかし、今だどこかで自分の『化け物』を引きずっている。

まじめな性格もあって、一番の常人。そしてツツコミ役（ほぼシヨウ専用）。

遠距離戦を得意とし、シヨウ並みに強大な力を持っているが、あまり戦闘力は強くない。そのためサポートに回ることが多い。主な理由はシヨウが彼女を戦闘にあまり入れたがらない事、他には、彼

女が遠距離を得意とするため、後から彼女が撃ち、シヨウが攻め入ると言う理由もある（本人は不満らしい）。

### 絆の証きずなのあかし

だが、何のために、そもそも誰かが作ったものなのかさせ不明の誕生不明の物。その力やほかのことも多くも謎に包まれている。一つの話では精霊王、すなわちソラの願いを星が具現化したものではないかと言われている。

その能力は、精霊王と契約、《彼女を幸せねすること》を契約させ、そのために精霊王の持つ星の力を与える。そして、完全契約をする事により、精霊王が契約者に憑依し、星の力を100%引き出すことができる。絆の証はその仲介役と力の制御（力の流れなど）

を務める。

与える力は精霊王と契約者同士で決めることができる。特に決めなければ約半分個になる。

これは彼女を幸せにできるであろう者を探し、その者を見つけたと、運命が引き寄せ合うかの如く、その者のもとに行くと言う、例えるなら、運命を引き寄せあうガイアメモリと、心清き者しか装着できない霊石アマダムの特性を持っているともいえる。ちなみだが現在の契約者であるシヨウは契約したおぼえがなく、また精霊王であるソラも契約したおぼえがないと言うだじょうぶなのか？と心配になるようなことをしている。

絆の証は時空管理局ではロストログア扱いされている。

ここから先はある意味今作のネタバレとなります。

覚悟は良いですね？

## 謎の仮面の男

シヨウやソラ、なのは達の夢や、幻影として現れる男。まるで彼らを知っているかのような口調で話してくる。どこかシヨウを連想させる。姿はシルエットとなって見えないが、顔にXのマークが付いており、背中に翼の様なマントがあり、何より特徴的なのは

展開したエクストリームが腰にあ

る。

## キャラクター紹介（後書き）

幻空「とまあ、こんな感じですよ。色々細かいです」

シヨウ「へー、良くできてるね」

ソラ「うんうん！」

幻空「どうやって来たかはあえて聞かないよ……」

ソラ「（ハイパークロックアップでなんだけどね）でも年齢鑑にジューズこぼすって……」

シヨウ「仕方ないだろ！？そもそも意図的にやってる君の方が問題あるだろ！」

ソラ「年齢は女性にとってタブーなの！」

シヨウ「てか君達精霊に性別ってあったんだ……」

ソラ「何度もいうけど、あるよっ！！性別あるから！！」

幻空「空気になりかけてるんで喋ります。まあ、エルフにも性別あるしね」

ソラ「……エルフは精霊とは少し違うんだけど……」

シヨウ「でもソラは星が生まれたとき生まれたんでしょ？ってことは年齢はろくじぶはあっ！！」

ソラ「言うなバカアツ!!」

シヨウ「な、何で……」

幻空「まあ、シヨウはやらねキャラですし」

シヨウ「ひどい……。」「

ソラ「主に自業自得だけどね。」「

シヨウ「そ、それより!僕の容姿に似てる人のことだけど!実際にはその人がモデルなんでしょ?僕の容姿!?!」

ソラ「……逃げた。」「

幻空「逃げましたねー。」「

シヨウ「うるせえ!」「

幻空「まあ、確かにシヨウの言ったとおり、その人がモデルなんですよー。」「

ソラ「やっぱり。って言っても分かる人も結構いると思うよ。まず名字のや名前とかで……。」「

幻空「シヨウって名前は当初は『翔』って漢字のつもりだったんですけど、リリカルなのはって漢字の名前の人少くない?って思ってた今の名前になったんです。」「

ソラ「さらにモデルの人に近づいたね（汗）。さらに『ハーフボイルド』とか、モデルとなった人怒るんじゃない？」

幻空「そんなときや、そんなとき！そして読者の皆様の中にはおそらく誰がモデルなのか分かる人もいます。今後の物語でそのモデルの人物を追及したいと思います。・・・シヨウの女装ネタと共に（ボソツ）・・・。」

シヨウ「ちよつと待って！？今明らかに問題な発言があったと思うんですけど！？主に僕が男として大事なものを失う方向で！？」

はやて「ええやん、ええやん、面白そうやし。」

シヨウ「はやて！？いつどうやってここに来た！？」

ソラ「実は最初的时候、連れて来てましたー。テヘッ」

シヨウ「テヘッ、じゃなああああい！！」

はやて「何言ってるねん、人生には笑いがないと生きてけへんでー」

シヨウ「その意見には賛成、だけどねえ、僕は！男としての！大事ななもの！失うわけには」

ソラ「そういえば、シヨウの顔って『女装すると・・・』らしいけど、それって顔つきはモデルの人の相棒さんみたいだから？」

幻空「いや、モデルの人の顔が『女装すると・・・』みたいなのになった感じだから。」

シヨウ「聞けよ!！」

はやて「残念!もう決定事項やー」

シヨウ「うおおおおーっ!!(無意識に井ノ原 真人風)」

幻空「何がともあれ、こんなキャラたちですが、よろしく願います!！」

シヨソ「こんなんて何だこんなんてっ!!!！」

はやて「どおどお」

第1話 出会（前書き）

やっと本編突入です！

## 第1話 出会

「今日も良い天気だね」

《ソーだね》

などと周りから見れば独り言を言っているように見える事をやっているのは、私の契約者であるシヨウと、シヨウの絆の証ネックレスに取り付いた状態の私、ソラです。

なぜ絆の証ネックレスに取り付いた状態かと言いますと、シヨウ曰く私は目立つらしいからです。

あの研究所の脱出劇から数年、今はシヨウの住む世界、『地球』に私は身を寄せ、静かに暮らしている。あの組織も追ってこないのは、ハイパークロックアップの時空を越える能力に、どこに飛んだのか観測できない特性が付いているからだと思う。だから、正確には、追って来ないと言うより、追って来れないんだと思う。

《ねえねえ、今日のお昼ご飯は何にするの？》

「うーん、そうだな、今日の昼飯は、「キヤアアアアアアアアアアア避けて避けてええええええええええつ！！」……………」  
「ハイ？」

思わず声が重なってしまふ。突然の謎の悲鳴が聞こえた方向を振り向くと、

度で坂を降りてきた。

車椅子に乗った少女がものすごい速

「ウウエエエエエエエエエエエエツ!?!」

《えええええええええええええええええつ!?!》

そのとんでも光景にシヨウの悲鳴が思いつきりオンドウルになつてしまっている。

正確には、そのとんでも光景は少女が車椅子にしがみ付いた状態でもものすごい速度で降りてきているんだが

「なぜっ!?!なぜあんな事になつとる!?!」

《………ブレーキが壊れたとか………?》

「綺麗なツツコミありがツウースツ!?!」

などと漫才を抜かしていると車椅子がさらに速度を上げて行く。一人の何かお姫様みたいな女性はいきなり前を通られ、「キャツ!」と悲鳴を上げ、手にライオンの人形を持った博士みみたいな男性は、「又ウオオオオオオオオオオオツ!?!」と叫びながら迫り来る少女の乗った車椅子から体育選手か?!?と思わず疑問に思つてしまふ様な動きで避けたりなど周りの人は、暴走車椅子から多種多様の反応をしている。

「なんだろ、あのお姫様みみたいな人とライオンを持った人達みみたいな人を何かで見た様な………」

《のんきに言ってる場合じゃないよ!!》

仮面ライダーで夢に関する事だったような………。だから  
っ!!…などとやっているが、暴走車椅子は近くまで来ている。

「って確かにこんな事やってる場合じゃないね。速くどかないと……  
……!!」

そこで彼の目にあるものが入る、それは、

坂の先にある、海。

アイ、キャント、フラアアアアアアアアアアアイ  
イ!!…

そんな叫びを上げながら海に突っ込んで行った青春ポイントを稼  
ぐ少年と、電波な少女が脳内で浮かぶ。このままではあの少女も同  
じ目に遭うのでは?そんな考えが浮かぶ。それは色々と危ない。実  
際に海に突っ込んで行った少年は右腕の骨を骨折している。さらに、  
目の前の暴走車椅子に乗った少女は車椅子に乗っているからして、  
おそらく足に支障があるのだろう。車椅子に乗っているからと言っ  
て必ず足が悪いという訳ではないが、それでも何らかの支障がある  
と考えてもいい。そんな少女が海に突っ込めば……。

「不幸だ……。」

《えっ?》

するとシヨウは、右腕を腰に据え、左腕をを広げ、腰を低くすると言う相撲の構えを取る。

「……俺の強さにい……………」

《え？え？やるの？やつちゃうの？気持ちは分からなくはないけど……………本気？》

すでにシヨウと同じ思考にたどり着いていたソラはシヨウの行動の意味を理解しながらも、戸惑ってしまう。

「お前が泣いたあああああああつ！！！」

《本当にやったあああああああつ！！！？》

少年はそのまま黄色いイマジンのセリフを叫びながら暴走車椅子にぶつかる。

車椅子に乗っている少女、八神はやては思う、  
なんでこうなったんや……………、

病院の診察の帰り道で、黒猫が前を横切って、そのまま道を通ったら坂に来たんで、少しブレーキを掛けようとしたらブレーキが効かなくて、慌ててタイヤを掴んで止め様と思ったんやけど、そんな時はもう遅くて、掴めへんほどスピードがあってもうってって、ああ、

もう不幸やあああつ!! 皆さん避けてええええええええええ!! やけど止めてええええええええ!! ああもう矛盾だらけやあああああああつ!!! ああ、前の人! 避けてえええええ!! やけど止めてえええええ!!

「・・・俺の強さにい・・・」

え? え? 本気? 本気で止めるん? 確かに止めてとは思っただけど・・・やるん?

「お前が泣いたあああああああつ!!」

「ホンマにやったあああああああつ!!!」?

そのまま少年は暴走車椅子にぶつかる。

「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬつ!!」

シヨウは衝撃に飛ばされかけながらも、何とか踏ん張る。だが暴走車椅子はなかなか止まらず、そのまま押され続ける。そしてついに、靴と踏ん張った時にできる靴後から摩擦熱で火が出る!

「《いや、ありえないからああああああああああああああああああああ!!》」

「氣い、散らさせないでええええええええええええええええええええええええ!!」

「《はいiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!》」

もはやカオス

暴走車椅子の速度は徐々に落ち始めるが、それと同時に、海との距離がもつかなり無くなつて来ている。そして

「ギ、ギリギリセエエエエエエフウウウウ……。」

「《ふにゃああああああああああああ……》」

崖っぷちギリギリで何とかこのmonsterを止める事に成功する。

「……………不覚ながら、クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ 栄光のヤキニクロードを思い出してしまった……………」

「……………奇遇やな、私もや……………」

《分かります。自転車でのシーンですね……………》

三人がそれぞれの感想を述べる中（ソラの声はシヨウウにしか聞えないが）、この奇跡を見ていた人たちから拍手が沸き起こる。

זרועות ארוכות,

夜天の主は、出会った

大自然の王と、





## 第1話 出会（後書き）

後書き 後書き やつと本編突入です！長かった（書き始めてから四日ですが）そしてはやてのりりカルキャラとしての初登場！  
まあ、多くの方はこの後の展開は読めてますよね

第2話 Oの少女／それは兄のよじり(前書き)

Oの意味はOnlyです

## 第2話 Oの少女／それは兄のよつに

「ホンマにすみませんなあ」

「イヤイヤ、これぐらい」

あの騒動の後、騒ぎを聞きつけておまわりさんが来たり、海に突っ込んでいったシヨウが海からヌツと出て来て（実際にはずぶ濡れになってあまりよく動けなかったせいだけど）それを見た人が「海坊主だーっ！」と叫んだせいで、さらに混乱に陥ったりして、・・・もはやカオス状態、大変な目にあつた。

・・・にしても、あのおまわりさんすごかつたな、騒動に対しては少しワタワタしてたのに、シヨウを勘違いした瞬間、雰囲気が変わつて、すごい飛び回し蹴りを放つんだもん。シヨウはそれに対して「佐賀美<sup>さがみ</sup>さん！僕は海坊主でもワームでもないわー！！」つて叫びながら防いでたけど、（その前に、その佐賀美さんつて人がすん止めしてたけど）シヨウつて、あのおまわりさんと知り合いだつたんだ・・・

あと海坊主だと叫んだ人、海坊主さん達に謝りなさい。海坊主はただ海藻ワカメを被つただけじゃありません。

そして現在にいたる。

ある程度服が乾いたシヨウは、はやてつて言う子を今家に送り届けている。理由としては、ブレーキが壊れてしまつて、またあんな事になったら大変だからとか。それにしてもこの子の慌て模様もすごかつたな、ずぶ濡れになったシヨウに向かってごめんなさいを連発で謝つて土下座しそうな勢いだつたんだもの。・・・車

椅子に乗ってるのに器用だなあ……。まあ、あんな事があれば罪悪感を感じるのも分からなくはないけど、実際にはこの子が悪いわけではないんだけどね。それに対するシヨウの反応すごかった、はやてちゃん、涙目で謝ってたからめちゃくちゃワタワタしてたし。

……。変なこと考えてなかったよね？（黒笑）

ブルッ

「!???」

「ん？どないしたんです？」

「え、い、いや、ナンデモナイヨ？」

「……。なんか、カナ表示になってる気が……」

「あ、あははは……」

（何か今すつごく黒いモン感じたんですけど特に首あたりからっ！？）

などとソラが放っていた『黒いモン』にビクビク怯えていた。

「そうですね……あ、そ、そういえば左風さんって綺麗なネックレス着けてますね？」

へんな空気を感じたのか何とか話題を変えようとする。

「ん？これ？」

と自分の<sup>ネックレス</sup>証を指差す。先ほどの恐怖はどこえやら……

それは、金色のSの逆文字で下部分ともう一つのS逆文字の上部分がそれぞれくっついており、その間に赤、藍、黄色、緑、蒼、紫、そして白の七色の宝玉が付いている（形状はウルトラマンパワードのフラッシュプリズムの赤い部分と中心の青い石だけにした状態に似ている。詳しく言うならフラッシュプリズムの赤い部分が逆になり、Sの逆文字型となっている。ただし、Sの逆文字と石の間には少し空間がある）繋がりを意味するようなデザインである。

「せや、ホンマに綺麗やな〜」

と、少し絆の証に見惚れる。

絆の証の宝玉は七色の色が常に配置を変えている。だが宝玉だけではなく、絆の証自体の美しさが見惚れるもので、ショウも当初はこれに見惚れていた。ショウがこれを気に入っているのもこれも主な理由だ。

「そいや、この真ん中の石、なんかにくっついとるようでもないけど、どっぴちやってくっついとるん？」

「……あ、？」

絆の証の中心にある宝玉は棒や糸でくつつかれてる訳でもなく、実際にはその中心に留まっているだけである。これは不思議な力でできているものなので、その事実を知るものならば、それなりに緊張するはずなのだが……。あるいは気づかなかっただけか……。ちなみに常人であるソラは

(ダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラ)

内心めっちゃ汗かきまくりである。いや、実際に汗をかいているのかもしれない。ただ、絆の証に取り付いた状態なので分からないが。

「あ、ここです。」

「ん、ここかい？なかなか大きな家だね」

「えへへ、そうでしょ？」

シヨウの言う通り、はやての家はなかなか、と言うよりかなり大きな家だった。

「まあ、外に居るのもなんですし、中行きましょ」

「ホイホイ。こちらコードネームLeft！八神はやての家に潜入成功！オーバー」

「ってなんで潜入ミッションになってんねん！あとバレバレやわ！」

「あいたー!？」

バシーンと綺麗なハリセンで叩かれた音がする。

「いたた、ハツ！僕のポケに対する間一髪も入れない綺麗なツツコ  
ミに、どこからともなくハリセンを出してくるとは!・・・八神殿、  
お主なかなかやるのお？」

「いやいや、そう言う左風殿こそ見事なまでのポケ、・・・やりま  
すのお？」

「クツクツクツクツクツクツクツクツクツクツ」

《なんなのこの人達、怖いんだけど・・・》

もはや完全に怪しい漫才人達に完全に引いているソラ。

「ま、楽しい漫才もここまでにして中は入るや。」

「Oui, madame」

(楽しい・・・?)

二人の会話に明らかなおかしさを感じながらも、二人を見守るソ  
ラ

「お邪魔します。」

「邪魔するなら帰ってや〜。」

「H A H A H A H A ! 僕を家に入れたのが運の尽き! T r  
i c k o r T r e a t だぜ!」

「なんでハロウィーンやねん!」

バシーン!

「あいたー!」

「クックックックックッ」

先に不安を感じながら……

~~~~~

「はい、どござ」

「あつ、ありがとう」

取り合えずはやての家に上がったシヨウは、はやてからお茶をい
ただく。

「ふひー、そついやはやてちゃんの親御さん達は?」

ただ何気なく、シヨウは聞いてみた。

「えっ？あ、あーちょっと今は留守にしておってな、今は居らんのよ」

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・?)

そこでソラは何か違和感を感じる。

まるで何かを我慢しているような、

まるで何かを隠そうとしているような、

何かを・・・・・・・・・・

(あつ、そっか・・・・・・・・・・)

とたん理解する。その違和感を

(この子は、かつての私に似てるんだ・・・・・・・・)

かつての自分、それは誰にも頼らず、自分一人でどうにかしようとしていた自分、誰かに迷惑を掛けまいと無理していた自分、それこそがかつてのソラ。

(この子は、抱え込んでるんだ・・・・・・・・全部、一人で・・・・・・・・あの子と一緒にだ・・・・・・・・)

同様にシヨウもしかめっ面をしている。

「あの、さあ、はやてちゃん」

「ん？なんですか？」

「いや、言いに、くいんだけどさ」

シヨウは頭をぼりぼりとかく。

「？」

それにはやては？マークを浮かべる。

「その、ムリ、してない？君」

「！……」

その言葉にはやての顔が驚愕の色に染まる。

「いや、これはさ、その」「やっぱり気づくきますよね、こんな嘘」
「……」

バツが悪そうに何とか言葉を選びながら言うシヨウをさえぎって
はやてがしゃべる。

「……………あー、やっぱりわたしは嘘が下手やなー、下手なら
なんでこんな嘘ついたんやろな、左風さん？」

自虐的にはやては笑う。

「……確かに、君の嘘もあるけど。正確には、君と会ってからで気づいたんだ、君がムリしていることに」

自己険悪な顔をしながら少年は口を開く。シヨウがはやての嘘に気づかせることは、

なぜ、はやての診断に親が同行していなかったのか。

「……そうなるよ、考えられてくるのはかなり少なくなる。

一つは、その親がそこまでの放任者か、もう一つ、は

「わたしの親、小さい頃になくなったよ。」

「……」

もう一つは言う前に口を閉じようとしたが、その前にはやてがもう一つを、自分の口から言い放つ。

「いやー、すごいな左風さんの推理は、名推理やホント」

あんだだけ少ない情報の中からよーたどり着いたわ、と述べる。

「わたし、小さい頃に親を亡くしとるからな、一人で病院に診察に行くんや、一人で、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はやて」

・・・・・・・・・・なにやっとなるんやろわたし・・・・・・・・

「それでいつつも一人でご飯食べるん。朝昼晩、毎日毎日、一人でいただきます言うて、一人でごちそうさま言うんや。それを何年も何年も、」

「・・・・・・・・・・はやて」

なに、口走っとなるんやろ・・・・・・・・・・

「一人ぼっちやから、朝起きても、誰も、おらんし、やから、おはよう言うても、誰も返してくれへんから、意味がなくて、おやすみも、返してくれへんから、意味がなくて、」

「はやて」

言うても意味ない・・・・・・・・・・

「時々、行く、図書、館に行く、時に、いつてきます、言うてもっ、行ってらっしゃい、言うてっ、くれる人っ、がっ、おら、んからっ、・！、意味、なくてっ、ただいまっ、てっ、言うても、おかえっ、りっ、言うてっ、くれ、る、人も、おらんっ、か、ら、誰もっ、家っ、におっ、らんっ、からっ、・！、」

「はやてっ」

彼に言うてどうする、何とかしてほしいとでも言

うんか？迷惑掛けるつもりか？困らせるつもりか？……

「わたしっ、ウツ、一人ぼっちやからっ……！、ヒック、一人ぼっちやか、らっ……！」

もうやめて、こんなお互いがいやなだけや、もう……

「はやてっ！」

突然の大声にビクッと体が跳ね上がる。

フワッ

「あ……」

すると、シヨウウに抱きしめられる

「……」

それはとても優しく、やわらかく、そして、暖かい。

「どごぞも知れない馬の骨の俺だけど、さ、これくらいは、できる
「ゆ

ぽしぽしと、ささやく。

「心の中に押しとどめてるもの、背負ってしまったてるもの、抱え込めるもの、全部、吐き出しちゃっていいよ、それを全部、受け止めるくらいは、さ、」

抱きしめられる暖かさとは、また一味違う暖かさ、その暖かさの名は、

愛情

「できるよ」

その愛情は、まるで兄のような、父のような、強くて、優しく、そして、何より暖かい、

長き間、それを味わうことができずにいた彼女にとっては、それだけで、十分だった、全てを、吐き出すには、

「う、あ、あああああああああああああああああああああああああ
ああんツツ！！」

何度願っただろう、

何度夢見ただろう、

再び、この愛情を味わうことを、再び、この温もりを感じることを、

「……………うん」

「全部、吐き出せた？」

コクッ

「そっか、よかった」

と、シヨウは微笑む。

あれから、はやては長い間泣き続け、まだ空の真ん中であつた日はすでに沈み、あたりは暗くなつていた。

そして

(うつつうつつうつつうつつうつつうつつ)

少女は果てしなく、困惑していた。

(あつつ、なんて事しとるんやわたしは、い、いくらお父さんやお兄ちゃんのような愛情を感じたからって、いや、まあ、わたしにはお兄ちゃんなんておらんだけど、たぶんそれやろう。を、感じてあそこまでなつちやうなんて、も、もうシヨウさんに顔合わせれへ

「おーい」

「ひゃ、ひゃいつ!?!」

「いや、ひゃいじゃなくて、」

ちょっと困ったような顔になる。いくら少女が顔を合わせれないと思っても、この少年はそんなことお構いなしに顔を合わせてくる。

「……………顔真つ赤だけど大丈夫？」

「ひゃ、ひゃいじょうびゆ！」

思いつきり噛んだ。盛大に。

ちなみにはやての顔の赤さかというと、顔全体がもうりんごちゃん、あるいはトマト？……………そこは読者の皆様に任せよう、のよ
うな赤さだ。

「そ、そう。……………ふむ、さて、はやてちゃん

「は、はい」

何とか落ち着きを取り戻したはやてはショウウと向き直る。

「今、太陽は下に沈んじゃってますよね？」

「うん」

まあ、確かに太陽は沈んどるなあ

「もう辺り暗いですよね？」

「……………うん」

……………なんかいやな予感がしてきた……………

「それでって、なぜ涙目になるっ!?!」

「ううん・・・グス」

グスツ、だつてえ〜

「いや、ううん、じゃなくて!」

《あゝ、女の子泣かした〜。》

「そこ、うっさい!そもそも泣かすような事してないぞ僕!」

《シヨウ・・・あなたの罪を数えなさいっ!》

「なんで!?!」

念話でワーワーギャーギャー言い合っ。

「はあ、まあ、ともかくね、」

「うん・・・」

なぜため息をつくのか分からへんけど何とか涙を押さえ込む。や
つて自分勝手な理由でシヨウさんに迷惑かけたらあかんやんかな、
ちゃんと我慢せなな・・・

もう辺りが暗いならば、おそらく彼は家に帰ろうとするだろう。
そもそも、ここまで付き合ってもらったのだ、これ以上はワガママ
はいえない。まだ寂しさを感じながらも彼が次に言うであろう言葉

に覚悟を決める。

だが、この野郎は意図も簡単に二人の
少女の常識を突き破ってくる

「……………キッチン、使わせてもらおうね？」

「……………ふぁい？」

二人の少女はなんとも間抜けな声を出す。その返事に、シヨウは
面食らっていた。

「いや、ふぁいじゃなくてさ……………」

「いやいや！別におかしくないよ！私の反応！」

《そうだよ！おかしいのあなただって！》

はやてからしてみれば自分から言っているだけだろうが、シヨウにとっては、一気に二人から文句を言われている状態である。

「おかしいって、別におかしくないでしょ？」

「《どこがあー！》」

「だってさ、」

はやてはみんなで晩御飯食べたいでしょ？」

「あっ……。。。」

《……！！》

その突拍子ひしさに二人は息を飲む。

「というわけなのです。」

シヨウのサムズアップ！

「てことでキッチン使わせてもらいますよ？はやちゃん？」

「えっ？えっ？」

呆気にとられているはやてを横に、そのままキッチンに向かうシヨウ。

「え〜と、これはこうで、あっ、こいつはこうね！」

既にキッチンの使い方を掌握し始めているシヨウ。そのシヨウにポケーとしながら近づくはやて。

「う〜ん、とは言えまだちょっと不安があるな、はやて！」

「は、はい！？」

突然呼ばれビクツとしてしまう。その様子に思わず笑いながらシヨウは、

父のような、兄のような笑顔を浮かべ、

「晩御飯作るの、手伝ってくれない？」

そう、はやてに尋ねる。

その言葉にソラはクスッと笑う。

一瞬呆気にとられたが、その言葉の意味を理解し、胸にこみ上げてくるものをなんとか制御しながら、

「うん！！」

全てを失った日より前にはできていて、
全てを失った日からできなくなった、

心の底からの、飛びっきりの笑顔で

答える。

第2話 Oの少女／それは兄のように（後書き）

ちよつと更新遅れました。色々ありまして（汗）。

今回のはやてですけど、ちよつとキヤラが崩れていると思う人もいるかもしれませんがね。ですが、これは僕の見解ですが、こんな感じの反応をはやてはすると思うんですよ。まず、親の死を隠したことについては、それは、自分の親がいませんって一人ぼっちの状態可言えるとは思えませんもん。それははやてにも当てはまると思いません。いくらのんきなところがあるとは言え、それでも、ちよつとは警戒すると思いますから。

次にはやてのシヨウに対する甘え方ですが、これも当然何じゃないかなーって思うんですよ。本編ではシグナム達が来た際、甘えるとかそんな行為はあまり見ませんでしたけど、それは、これも僕の見解ですが、どちらかというと、シグナム達はいわゆる保護する対象、いわばはやてが彼女達の保護者になる感じだったからではないでしょうか？実際に衣食住の面倒をみるとかそんな事いつてましたし。ですからこう、いわゆる子供として甘えられる感じがあまりなかったからじゃないんでしょうか？ですから、父や兄のようなシヨウにこう甘えるようにしてみました。実際にシヨウは兄的な存在として書くつもりですし。

しかし………あんまほのぼの書けてねええええええ！シリアスが多い！ヤベーツス！！文章も視点の書き方も少し分からずらいし、それにはやての関西弁も少しちゃんと書けているか不安が……。
もうちよつと改良してみるか………。

そのためにこのことに関してのことなどでのアドバイス&感想お願いします！

第3話 守護者の約束

「ごちそうさまー！」

いつもなら、一人だけの言葉やった。やけど・・・

・・・

「ごちそうさま、そしてお粗末様」

今は、一人じゃない、今だけは、決して、一人じゃない。一緒にいただきますして、一緒にごちそうさまをしてくれる人がある。やから、今だけは、違う

それは、今だけかもしれない、だが、それでもはやてにとっては、例え短い時間だったとしても、とても、幸福な時間だった。

「お皿、洗つとくぜー」

カチャカチャとシヨウは、音を立てながら皿を組み上げ、台所に持っていく。

「あ、ええよ、そんなにしなくても、わたしがやるから。」

・・・それに、シヨウさんにこれ以上長居させたら悪い

し……」

最後のほうだけ、声が弱くなる。どうしてももう少しいて欲しい
と言う願いが出てしまう。

「だいじょぶだいじょぶ。別に迷惑じゃないからサー」

お気楽に返事しながら皿を洗い始める。

「でも！シヨウさんの親が心配するし……」

「僕、親がないからそんなこと平気だよ。」

……え？

今、なんて……親が、おらん……？

「すつ、すみm」『すみませんとか別に謝らなくていいよ』……
ッ！で、でも！」

「大丈夫だって。僕もはやちゃんに失礼なこと聞いちゃたんだし」

「せ、せやけど……。」

「それにさ、」

びたりと皿を洗う動きを止める。何?と思ひながらはやてはシヨウの後姿を見る。

「……俺はあんな奴らを正直、親とも思つてすらいないし……。」

静かに、そう言う。その表情は後姿のために見えなかったが、その言葉に深い悲しみ、怒り、そして、憎しみが含まれていることを感じる。

「……まあ、そんなわけだからさ、気にしないでよ」

「そ、そうなんですか……。」

はやては少し呆気ながらも返事をする。

「……ちひ、」

皿を洗い終わったシヨウが真剣な顔をして、はやてと向かい合いの椅子に座る。

(ゴクッ)

その真剣さにはやては気を引き締める。

「……………何しようか？」

その言葉にはやて(とどうやってかは不明だが、ソラも)がズコ
ーッと綺麗にずっこける。

「いや、まあ、もし帰って欲しいなら帰るけど」なんでやねんっ！
「！」

バシーンッ！

「いてえ！？なんで！？今のはボケじゃないよ！？」

「十分ボケやわ！真剣な顔をされたから気を引き締めたのに、さっきまでのシリアスを返せや！」

「シリアスって、僕あんまシリアス好きじゃないんだけど」

「さっきまであんな重たい空気作っとして、どの口が言う！これか？
？これかあ！？」

椅子から身を乗り出し、シヨウのほっぺを掴んでうみゅうみゅしている。
ひゃめなひゃいひゃやへひゅん、とうにうにほっぺをされながら文句を言う。

「まったく、身勝手はレディーに対して失礼やで！」

「小学2年生が自分のことをレディーというのはどうかと、まあ合ってるけど」

「そこ！うっさい！あとわたしは小学3年生や！」

Oh!？コリヤシツケイ！？となぜかカタコトな外人さんのような口調で訂正する。

「もう、失礼な人やなあ」

「さーせん」

「だけどそやな、うーん……」

とシヨウウに何してもらおうかとはやてはうんうん唸り始める。それをシヨウウは「そーいや、仮面ライダーで、水や氷技を使う仮面ライダーって少ないよなー」と場違いなことを考えていた。それに対しソラは「何考えてんだこの人……」な顔で絆の証の中からシヨウウを見ていた。

「じゃ、じゃあ、何をしようかって言うより、お願い何やけどな……」

「ウェイ、ウェイ、何でしょう？」

少し顔を赤めながらはやてはもじもじしながら口出す。シヨウウは特にその仕草に気を止めず、話を進める。ソラは、ビミョーな顔を

していたが。

そして少女は爆弾を落とす

「………わたしの、家族になってくれへん？」

「はさ」

.

.

「僕はポケキャラだ」

「はい」

「だからツツコミはあまりやらない。」

「はい」

「だけどね」

「はい」

「これだけ言わせてくれ、」

「なんでやねんっ!!」

「パソコンッ!!」

「あいたあっ!?!」

「どこからともなく『なんでやねん』と金色の文字が書かれた緑のスリッパを取り出し、はやての頭をはたく。

「いたあ、ないすんねん!」

「なにすんねんじゃないわ!どこそぞの知れない馬の骨のワイにいきなり『家族になって』ってどうやねん!」

はたかれた頭をさそりながらシヨウに文句を言つと、シヨウがいきなり関西弁になり、はやてに色々問題を言つていく。

「ちよい待ち！なんでシヨウはんは関西弁しゃべれるん？」

「ふふふ、では教えようではないか、はやて嬢、それはワイがなぜか関西弁っぽい所があるからや！」

《全然理由になつてない！？》

ガビーンとソラが変なシヨックを受ける。

「そうかそうか、シヨウはんは関西弁をなぜかしゃべれるんか、
・・なら関西弁同士の言い争いや！」

《なんか納得してるし！あとなぜそうなつちゃうの！？》

「ふふふ、いいやろっ！」

《だからなぜ！？》

はやてに対するツッコミは当然本人に聞こえてないため意味がなく、シヨウに関しては、聞こえるはずなのだが、完全に無視。である。

のんきなためき関西人

八神はやて

V S

どこぞの青髪なピアスよりは断然にちゃんとした関西弁な人
左風シヨウ

FIGHT!!

「そもそも、さっきいうた通りな!どこぞも知れへん野郎にいきな
り家族になつてつててのはおかしいわ!今日あったばっかやる!」

「じゃあ、シヨウはそんな怪しいこととか、変な事とかするん?」

「いや、しないけど……。」

シヨウに28ダメージ!

「それに、シヨウはわたしのこと助けてくれたやん!……それ
にあれ、暖かったし……。」

「へ?」

「な、にやんでもにやい!」

バシーンッ!

「なんでや!?!」

はやてに12ダメージ!

シヨウに32ダメージ！

「そもそも、助けたって、……ただおせつかいしたただけやん
！」

「ちゃうもん！ちゃんとわたしのこと考えてくれたやん！抱えこん
どったもん吐き出させてくれたやん！」

「だからおせつかいやって！そもそもこれ関係ないやん！」

「うっうっうっ。」

はやてに23ダメージ！

「そ、それに！わたしが言っとる家族になつててのは、同居人とか、
一緒に暮らしてって意味やに！」

「いやそりゃ、わかつとるけど、……色々と問題がな？……」

「あかんの……？」

「ぶほおお！？」

上目使い+涙目のCOMBO!!
シヨウに124ダメージ!!

「ぐ、だ、だけどなあ……」

何とか耐え切った！

「……………」

「m a m m a m i a。」

上目使い+涙目+目からキラキラ+至近距離のCOMBOにp o
w e r u p!!!

シヨウに257ダメージ!!!

「はぁ……………」

思わずため息が出る。いくらなんでも見知らぬ相手を、とはどうかと思ったが、正直まだ8歳か9歳の女の子を一人ぼっちにしておくのは気が利ける（というか、色々問題があるはずだろ！？）。だとすれば……………」

「わかったわ……………」

「ホンマに!?!?やったあ!?!」

「どういつしかないだろYO……………」

WINNER!のんきなためき関西人 八神はやて

《なんだかツッコミどころが多くてわかんなくなった……………》

細けえことは気にすんな(アंक風)

「え〜と、シヨウには、これかな？」

シヨウは『ポケ担当な関西っぽい人』の称号を手に入れた！

「まあ、最初のよりはマシかな？」

《まだやってたんだ……》

「でもこれでシヨウはわたしの『家族』決定やな！」

「まあね〜、けどはやて」

「ん？」

シヨウがはやての目線に合わせるように背を低くする。

「僕は最初言ったとおり、家族なんていなかった」

「……………」

いつも通りの顔で喋るが、その言葉はそれとは正反対な意味が込められているのを感じ、じっとシヨウの言葉を聞き続ける。

「だから、正直言つて家族ってどんなものか分からないんだ」

シヨウの放つ言葉、それはかつてソラにも、家族になった時に言われたことであつた。

「もしかしたら、家族って言葉とは違う家族になってしまうかもしれない。僕バカだし、抜けてるし、とんでもない間違いを起こすかもしれない。だけど、ね、」

ポンッつとはやての頭に手を置き、笑い、そして言う

「僕は、自分なりにがんばって、家族になっていきたい。僕は、自分なりにがんばって護っていきたい、

君達の、居場所を、夢を、時を、この町を、笑顔を、護っていきたい。これが、僕の、左風シヨウの、約束」

スツと右手の小指を出す。

「……………うん！」

それに自分の小指を結びつける。

「「ゆーびきーりげーんまーんうっそつーいたーらはーりせーんぼーんのーます、ゆーびきつたー！」」

そうして、二人の家族は、お互い、笑いあう。 ソラもまた、この二人を見て微笑む。

第3話 守護者の約束（後書き）

感想&アドバイス待ってます。

第4話 秘密がばれた!?

side ソラ

「むっ、あんまり面白い番組やってへんな」

「まー、この時間帯じゃしょうがないっしょ」

今、はやてとシヨウはテレビで何か面白いものがやってないか、検索中。シヨウの言ったとおり、この時間帯はあまり子供にとっては面白いものはないかも。

「録画したテレビとかってないの?」

「一応あるよ」

「んっ、なにになに、って録画多いね……」

「仕方ないやん!わたしあんまり外で遊ばへんのやし!」

「そーでした……。。又、ウオオオオオオオオオオオオ
!?!」

「うにゃ!?!隣で急に大声ださんといでな!」

「それは謝ろう!だがはやちゃん……これは仮面ライダーではないか!?!見るのかい?君も見るのかい!?!」

「なんかすっごく張り切つとるな……まあみるよ、時々やけ」

どな、シヨウも見るん?」

「フッフ、見るも何も、見まくつとるわっ!クウガからず〜と!語ってやるうかはやちゃん!」?

「しやんでええよ、つてもう語りだしとる!」?

なんか話題それてるよ……。まあ、いつか楽しく時間過ぐせれば、ん?なんでシヨウの熱説が楽しいかって?だってその熱説をポケながら話してるもん。そのポケにはやてがツツコンであるから、ポケな人と、ツツコミな人には楽しいんじゃない?実際にお互い笑ってるし。……のどかだなあ。

「まあ、漫才はこれぐらいにして、そろそろはやても風呂入ったら?というかそろそろ子供は寝る時間ですよ」

「何子ども扱いしてんねん!まあ子供やけど。せやな、そろそろ入ってくるわ」

と言い、風呂に向かおうとする。

《シヨウ、私もお風呂に入りたいんだけど》

「あー、ちょっと待ってね、はやてが眠ってからにしよう」

シヨウははやてに精霊王に関することや、自分の能力に関することにはあまり関わってほしくないみたいで、ばれない様にしていたらしい。こんなのいつかはばれるけど、その時は、これらを受け止められる時期、すなわち、大人になってからにしたいという願があるの。だから、今はこんな行動をしているの。

すると、はやて途中で止まり、シヨウのほうを向く。

「せや、シヨウも一緒に入る？」

はやてがニマニマ笑いながらとんでもない事シヨウに提案する。
はやて、あなたって子は

「別にいいよ」

……ハイ？この白黒さんはなんと言いました？いい？
別にいいと？

はやてはトマトな顔をポカンとしてるぞ。しかもこいつは仮面ライダーの番組を再生しようとしてるから気づいてないし、と言うか・
……

「何言ってるんじゃこの変態クサレロリコン野郎おおおおおおお
おおおおお！……！」

「ぐぶはああああああああつ！……？？」

絆の証から出てきて思いっきり蹴飛ばしてやったぜ！（サムズアップ！）

side はやて

あ、ありのまま今起こった事を話すで！

シヨウが風呂入っておいでって言うたから、風呂入ろうと思って
いこうと思ったら、面白いことが思い浮かんだんで、実行してみたら、シヨウからまさかの素でのOKが出てきたんや、それにあんぐりしとると、いきなりネックレスから人が出てきて、シヨウを思いつきり蹴り飛ばしたんや！そして、サムズアップ！思わず見惚れてしまうほどの美少女が出てきて、蹴り飛ばしたんやで！そしてサムズアップやで！重要やから二回言うた！

……ホンマに綺麗、とかわいい人やな。

……ちよっとシヨウとO H A N A S H I Iやな……

side シヨウ

ぐんぐん

無意味だった。

「いやいや待つてくれい二人とも！『さあ、地獄を楽しみな』的な感じでこないで！？ほんとに理由を教えてください！？」『答えは聞いている！』ですから！？」

だんだんと丁寧語になっていくシヨウ。そんな風になってしまうほど恐ろしいのだ、今の二人は。

「まだ気付かんとは、まあわたしらは鬼じゃない、この哀れな罪人に教えてあげようではないか」

「ハイ！ぜひともお願いしますーっ！？」

もはや涙目のシヨウ。哀れだ主人公……。

「なら最初には、はやての質問に対することね」

「え？質問？」

シヨウに？マークが浮かぶ。

「ほんとに気付いてないのねー。（黒笑）」

「お、落ち着いて！ソラさん！落ち着いて！あれってテレビ見ながら返事したのが悪かったの！？それとも素っ気ないことが酷かったとか！？」

「……はやてと一緒に風呂入っていいって言ったことよーっ！」

近所迷惑になるぐらい、思いつきり叫ぶ。その叫びにはやてが少し顔を赤くする。そしてシヨウは

「へ？別におかしくないじゃん。」

と素で答えてくる。しかもなんで？と言った表情を浮かべている。

「あるよ！思いつきりあるでしょー！！」

ムキーツと腕をブンブン振り回しながら、叫ぶ。それにはやてがさらに顔を赤くする。先ほどの黒いモンはどこえやら、シヨウも完全に恐怖を忘れている。

「いや、だってさ、」

「だって何!？」

息が思いつきり荒げてしまっているソラに対し、

「はやては、足が悪いんでしょ？だから風呂入るのに手伝ってほし
いって言ったんじゃないの？」

当然かのように、と言うより当然なのだが、落ち着いて答える。

「……………あつ。」

二人は間抜けな声を出す。

これに関しては、はやても気になっており、当然じゃないことを考えていたはやてとソラにとっては、まさに盲点だった。

「あつ、つて……何？僕が良からぬ事を考えてはやてと一緒に
お風呂に行こうとしたと思ったの？」

……コクッ

「どんだけ信用ないんだよっ！！」

そう叫ぶと、ひざを抱え、のの字を書き始める。

「じゃ、じゃあ今度はわたしや、なんでいきなり美少女がシヨウの
ネックレスから出てくんの！？」

「……どう説明してくれるんでしょうね、ソラちゃん」

「え、あ、あれ、なんか立場逆転してるううー！？」

シヨウがソラをジト目で睨み、自分の求める答えがソラにあると
理解したはやては睨んだ目線をシヨウからソラに移す。ソラはそれ
に涙目でたじたじである。

行動は災いの元。

「口は災いの元でしょおおーっ！？」

少女と少年（主に少女）説明中

「と云うわけだから・・・」

「まあ、こんな感じかな？」

「なるほどなるほど」

ソラが精霊王のことや、星の力についてなんとか説明し終える（シヨウは追加説明をした程度）。

「シヨウ達の事情は大体分かった。やけどなあ・・・」

「「？」「」

「その能力、めつつつつちやチートやろおおおおおおおおお
つ！！！！」

バンバンとテーブルを叩きながら思いっきり文句を言う。

「なんなん！そのめつつちや便利さ！元が星によるものなら、どんな
ものでも再現可能って、ふざけとるやろおおおおおお！！！！」

驚愕の目をシヨウとソラに交互に向けるが、シヨウはその視線に当たった瞬間、はあ、とため息をつく。

「星自身の力とは別な力でも、星で起きたものならば、それを星が記憶して覚えている。それがどんなものであると、それは星で起きた出来事、現象なの」

「そして星が具現化した存在であるソラは地球の記憶からその現象を引っ張り出して、どんな現象をも、星の力でできる範囲なら、大きさ小ささ関係なく再現できるって言うチートさだよ。例えば、星自身の力ではない太陽光を、ソラの力でなら再現することができるんだ」

「め、めちゃくちゃん……………」

「僕もこの話を聞いたとき、大蛇丸とかの『穢土転生』や上条当麻の『イマジンブレイカーの幻想殺し』、——方通行の『アクセラレータ』が思い浮かんだよ……………」

「他のは知らんけど、ナルトは見たるから『穢土転生』も知ってるよ、やからそれが思い浮かぶのも分かるよ……………それも再現できるんちゃう?」

「いやいやいや、それはないよ……………だよね?」

「はやての考えを笑いながら否定するが、やはり不安でソラに聞いてしまう。」

「いや、私それどんなのか知らないから」

「……………このままのほうがいいかもね」

「……………せやな」

「やけどさ、太陽光も再現できるんやろ？」

「うん、そうだよ」

「……………その心は？」

「……………ウルトラマンの技など再現可能」

「……………そりゃ、エネルギーは太陽の光やからなあああー……
ー！！！！」

「しかもガイアやアグルは地球のウルトラマンだから……………
」

「別に星だけの力でも再現できるウルトラマンもおるんかああああ
ああー……！！！！！！！！」

再び、テーブルをバンバン叩き始める。……………痛くないのだ
ろっつか？

「いたい……………」

痛かった模様。

「何やってんねん！！」

「うう、やってみちゃくちゃん、シヨウ達の能力」

「まあね……ほら、手を見せて」

手の痛みに若干涙目になりながらもシヨウに手を見せる（その際、偶然上目遣いになり、シヨウがドキツとしたとかしなかったとか）。

「あ、赤くなってるよまったく。でも僕達の能力は確かに、今はやて見たいな考え方なら、完全チートだろうね」

「へ？」

手をシヨウがすりすりと摩りながらはやてに呟く。……痛いの痛い飛んでけだろっか？

「一応、この能力には限界や、リスクもあるんだよね」

「えっ、そうなん？」

「ん？そうだけど？」

シヨウの呟きにはやてがソラに真意を確かめるが、本当のようだ。

「どんなリスク？」

「そうだね……例えば、マンガやアニメでもよくある大技使うにはチャージが必要とか、ある特定の方法でやらないと発動できないのとか、かな。ほかに、使い方とかを失敗すれば、僕自身が吹き飛ぶとか、ようは、ちゃんと理解もしてない力を使えば僕だけがダメージを負うとか、……下手したら死ぬってのもあ

るし、中には……」

「めっちゃ危ないやん！」

星の力は決して万能ではない。ただ単に応用がとても広く利く力の量が多いだけ、ばんばん無数の力を使用できるわけではない。頭の中に戦い方が入って来るわけでもない。技や能力のどれを使うにしても、どう使うか、どんな効果か、どんな反動か、どんな副作用が来るか、それらを理解せず使えば自分の身を滅ぼす事となる。

例えばウルトラダイナマイト、超人戦士のウルトラマン達の中でさえも禁断と知られるタロウあの技をよく知らず使えば、自分の体が粉々に吹き飛ぶのは明白。クウガのライジングマイティキックをよく知らず使えば、半径3kmが火の海に変わってしまう。他にもエネルギー量を考えずに技を放てば、力の量が多いだけにとつもない被害が出てしまう。その上ショウは人間、放出できる力には限界があり、これを超えると自分自身が残酷な方法で『吹っ飛んでしまふ』。

これらは当然のことだが、ショウ達の場合は星の力が丸々半分あるため力の量がハンパなく、これらが異常にも重要なのだ。

「　　つてことは完全にチートじゃないってわけなんや」

「そだね」

「やけど、仮面ライダー全部の技と能力ね」

「まあ、簡単に言えば僕が使う力は主に仮面ライダーディケイドみたいなもんだよ」

「あ、それ、ええ例え」

「まあね、あと一応言っておくけど、僕が使えるのは仮面ライダーほぼ、と言うより多くの技と能力だから。」

「？なんで多くなん？」

「そりゃ使えない技とかあるよ、アドベントとかさ、他にも銃撃は僕使えないし。使うのはソラだから」

「ほへ？なんでまたそんな風に？」

「さー、僕も分からんのだよ。そのせいか、クウガのペガサスの超感覚はソラになっちゃって、僕は使えないんだよ、結構好きだったのに……」

「で、でもそつちのほうバリエーション多いじゃん！私は銃撃とライダーキックとかだけだよ！？ウルトラマンは私あまり知らないから使えないし！仮面ライダーも知ってるの少ないし！」

シヨウがなんか落ち込み始めたので、なんとか立ち直らせようとシヨウの力のいいところをあげていく。

「ま、まあ要するに、シヨウ達はよく知らんことはできへんってことやね？」

「……そーゆーことでーす」

「だーかーらー！落ち込まないでよー！」

いまだ落ち込み気味のシヨウ。

「もう、シヨウのバカ……。あとはやて」

「ん？」

「……貴方は私の力のこと、ちゃんと理解した？」

その言葉に落ち込み気味のシヨウがピクリと反応する。

「うん！ちゃんと理解したよ。」

「……それは理解したつもりじゃなくて？」

「へ？う、うん……。」

ちよつとソラの雰囲気を押され気味だったが首を縦に振る。

「じゃあはやて、私のせいで……滅びた世界が複数あることも、理解できる？」

はやての顔が驚愕に染まる。それに対し、ソラはため息をつく。

「いきなり複数の世界とかわって言われても分からないよね、ちよつとここから、かな？」

ソラが話し始めたことはシヨウもかつて話されたこと、

世界には、この世界含めて、次元世界と言う世界が複数あると言っている。

魔法と言う、超科学として扱われる存在、

この世界では、ありえないようなことが他の世界ではありえること、

それらをソラははやくに話した。当初は信じれない、といった表情だったが、ソラの真剣さ、シヨウの沈黙からそれが事実であることを知る。

「こんなものかな？はやく、わかった？」

「うーん、まあ、だいたい、かな……。やけどソラのせいで世界が滅んだって……」

「そのまんまの意味」

ソラはぱつさりと答える。

「私の星の力は貴方が言ったとおり、チートすぎる力、まして、魔法とは、かけ離れた存在。そんな力を狙わない奴がいらないと思う？」

その言葉にはやては心辺りがる。はやては親を亡くした時、その財産は多くないとは言え、すべて彼女の物となった、そしてそれを狙い、近寄ってきた者達はいた。今は、『父の友人』のおかげで何とかなっているが、ソラの言うのはおそらくその『近寄ってきた者達』のような人達であろう。

「心当たり……あるでしょ？」

「……」

はやては無言で頷く。

「私の力を狙ってきた奴らは大勢いた、そして散っていった。どうしてだか分かる？
それは、
愚か者

— 戦争（争い）よ —

はやての表情が驚きと悲しみになり、シヨウは渋い顔をしていた。だがソラは、

無表情だった、

元から何もないような、空っぽの、冷たいほどの、無。
それだけの表情だった。

「私の力をほしいあまり、人武器を持ち、人を殺した。

私の力をほしいあまり、人は友も、家族も、裏切った。

私の力をほしいあまり、人は何もかもむちゃくちやにした。

もう既に私はそこにいなかったのに、それに気付かず、人は戦争を続けた。

次々と一兵器（殺す道具）を作り、次々と破壊していった。そして、壊れた」

ソラは自分の言っていることを気にせず、まるで人形のように、機会のように、口を動かす。

それがどんなに恐ろしいことでも、言っていく。

「それは、一つに留まらず、他の世界でも、私が訪れた世界で、何度も、何度も何度も何度も起きた。ただこの力がほしいあまり、人は全てを破壊した。……確かディケイドだっけ？なんか、似てるよね、その人と私は色々な方面で」

はやてがその言葉にビクツとなる。彼女がその言葉を発したとたん、雰囲気、空気が変わったのだ。

それはかつてショウウがソラとであった時に出したものの、正真正銘

人ではないものしか出せないものを、彼女は放っているのだ。

「・・・・・・・・・・それとも、悪魔がよかったかな？」

フツツと無の表情で無の笑いを出す。はやては顔を俯かせたまま、何も動こうとしない。

重すぎるのだ、10歳未満の子供にはあまりにもこの空気は、重すぎたのだ。心なしか、少し震えている。

「どっ、はやて？」

ゾツとするような声で、はやてに問う。

「これでも私を、ちゃんと理解したなんていえる？これでも

「

「キングストーンフラッシュュ!!!」

その、一言。たった一言の場違いな、空気を読まない発言がガラリと空気を変える。

はやてとソラはショウの発言に完全にポカンとしている。それに気付いてないのかショウはさらに言葉を続けていく。

「説明しよう！キングストーンフラッシュュとは、仮面ライダーブラックと仮面ライダーブラック！オールエックス！が使用する技であり！その効果は幻術・妖術を打ち破ったり、敵の正体を暴くなどの力がある!!!」

「「どうでもいいけど（ええけど）、あなた何言ってるの（言ってるんねん）」」

ズビシ、と突っ込む。

「いやいや、だからキングストーンフラッシュュは幻術・妖術を打ち破ったりとすごい効果を持つんですヨ」

「だから何（やから何）!!!?」

「さっきの空気を打ち破った」

「!」

「.....」

その言葉にはやては驚き、ソラは黙り込む。

「まあ、そういうことよ。それに僕、シリアスあんま好きじゃない
し〜）（　　）」

「・・・あはは」

「・・・」

こんな彼に思わずはやては笑ってしまう。

そうだ、彼はこんな人間なのだ。はやてはシヨウと一緒にいた時間は短い、それでも分かる。彼はこんな人間だと。だからこそ笑ってしまうのだ、こんなことができってしまう、彼を。

ゴチンッ

その一つの音と共に、先ほどまでの、重く、冷たく、張り詰めた、恐ろしすぎる空気が消える。

はやては慌てて顔を上げる。そこには

ソラに向かって仁王立ちするシヨウと、額を押さえてうずくまっ

ているソラがいた。

「まったく、こんな子供に、あんな雰囲気だすんじゃないなああああ
あいー!!」

まさしく『怒』が頭に付きそうな感じで怒鳴りつけるはシヨウ。

「だ、だからって、なんで急に頭突きされるのおおおー!??」

相当痛かったのか、額を押さえて涙目になっているソラがシヨウ
を見上げる。

「僕の三大技を忘れた君が悪い!」

「むちやくちやだあっ!!」

先ほどまでのことが嘘かのように言い争う二人、その様子をポカ
ンとしながらはやては見ていた。

彼ののんきすぎる性格はある意味問題だが、それのおかげで先ほ
どの状況を一気にぶち殺せるのだから、案外いい性格をしているの
かもしれない、彼は。

「まったく。ああ、あとはやて」

「は、はい?」

「ん」

とソラを指差す。

「？」

その行動にソラは首かしげているが、はやてはシヨウの言いたいことを理解する。

「ソラ」

「……何」

はやては車椅子を動かし、ソラと真正面になる。ソラもはやての行動を理解したのか、表情が真剣になる。

………そつ

「!!--!」

するとはやてはソラの両方の頬に自分の両手を当てる。その行動にソラが驚く。なにせ先ほどのことがあったのだ、それなのに、こんなことをしているのだから、驚くだろう。

だが言い換えれば、それははやてが先ほどのことに恐れをなしていないこととなる。むしろ、真正面から向き合っている。

「ソラは、……優しいなあ」

「なっ……!」

思わず驚愕する。

「だってそうやる？ソラは私に自分は危ないって、だから近づくな

って、それは私を護ろうとしとるからやる？自分自身から」

ソラははやての言葉に困惑してしまう。なぜこの子はこんな事を言えるのだろう、なぜこんなに優しくするんだらうと、化物の自分になぜ向き合ってくれるのかが分からなかった。

(これじゃあ、これじゃあまるで

)

と隣にいる人物を目線を動かして見る、

「自分の危険性とかを教えてください。そこから少なくとも、悪い奴ではないと判断できるね」

「自分が危ないって教えてくれとるから、やからソラは優しいって言うとるんやよ?」

(ショウみたい……………)

自分を救ってくれた人物を、見る。
そして、はやてを見る。

「やけどな、わたしはソラを危ないなんてちっぽけも思っておらんよ、」

「……なんで」

「だってソラは優しいし、他人を傷つけることがいやな人やと思うんやもん。それにな、しつとる？」

はやては優しく微笑む。

「一デイケイド（破壊者さん）はな、仲間がおるんよ、自分の帰る場所となってくれる人、自分を支えてくれる人、ちよっと困った人やけど、いろいろと助けてくれる人、心を支えてくれる人、他にも色々な人たちがおるん。やからデイケイドは悪魔と呼ばれようが破壊者と呼ばれようが、がんばれたんや、やったらソラも同じやや、ソラには

私達、家族がおるやろ？」

ソラが今度は目を開く。シヨウがクスツと笑う。

「でも……」

「でもないで。」

はやてが言葉を制す。

「ソラはシヨウの家族やったんやろ？ やったらわたしと家族になつてくれたシヨウのおかげでソラもわたしの家族やない。なんもおかしい事はないやろ？」

ソラが戸惑ったのかシヨウを目線を動かして見る。その目線に気が付いたシヨウは、ソラに頷く。

「……………二人ともずるいよ……………」

ソラがそう呟く。

「それでもええよ。」

はやてがまた微笑む。

「うんうん。」

シヨウが再び頷く。

「ぷう……………」

「なんや、頬膨らまして〜。」

はやてがソラをこのっ、このっ、と突つつく。ソラがやめてよっ、と嫌がっているようだがどこか喜んでいた。

「ふふ、さーてこの話も終いだ！早く風呂入ってこい！」

シヨウが明るく二人にそう告げる。

「オツケー、じゃあシヨウ、一緒に入るや！」

「結局入るんですね、僕は。ま、いいけど」

「じゃあ、ソラも一緒入るや〜」

「え?」

「いやちよつとまってえい!なんでソラが入るんだい!と言うか入りきらないだろう!」

「だいじょうぶやで〜、風呂結構大きいから。」

「……だつてさ」

「だつてさ、じゃなくて!色々最初に言ってきたのは君らでしょお
おおっ!?!?」

「細かいことは気にしない気にしない」

「気にするわあああああっ!?!」

迷わず180度回転してBダッシュで逃げ出そうとするが、

ガシッ!ガシッ!

いつの間にかすぐそばまで来ていたソラとはやてに両サイドから腕を掴まれ、逃走ができなくなる。車椅子なのにここまでの機動力、恐るべし、八神はやて。

「いや、十分おかしいだろ!テーブル挟んでいるし、思いっきりダッシュしたのにどうやってすぐそばにいるんだい!」

「なんの！これしきで逃げ切れると思うな〜！」

「ソラちゃんんっ！！！？？」

「あはは・・・」

「あはは、じゃなああああいつっ！！ってやめろ！僕を風呂まで引っ張るなってアツ」

（数分後）

「ハアーツ、ハアーツ、し、死ぬかと思った・・・」

男の意地にかけての必死の抵抗により、何とかはやて達の悪魔の誘いから逃れることのできたシヨウ。オーバーだろ、と思う人もいるかもしれないが、本人にとっては一大事である。主に男として大事なものを色々と失う方向で。

『わー、おっきなお風呂！』

『せやるせやる〜？バリアフリーなめんなあ！』

風呂場から二人の少女の声が聞こえてくる。

「やれやれ、はやちゃんもソラちゃんも困ったもんだ。片やとんでもない行動をしてくるし、片やノリに乗っちゃってそのとんでもんについてくるし、ヤレヤレだぜ」

『ソラ！背中洗いつこしよー！』

『ん、いいよ』

そんな聞こえてくる話し声にシヨウの顔が緩む。

ソラは様々なつらい目にあってきた。その傷は今だ癒えず、残っているはず。そんな傷を癒せるのはこんな何気ない一日常（幸せ）ではないのであろうか？そんなことを考えると、シヨウの顔は緩む。

「僕一人じゃ彼女の傷を癒すのに限界があつたしね、それに、はやてにとつてもこれはいいことだ・・・」

はやてもまた家族を失い、苦しい目に会い、心に傷を負っているはずだ。そんな彼女に『新しい家族』と言う存在は、その傷を癒すために最も効果的はずだ。

お互いがそばにいるだけでお互いの傷は癒える。これをすばらしいと言わなければなんと言う？

「そして、これを守るのも一守護者（僕）の役目ってね・・・」

フツ、と笑うと仮面ライダーの録画を再生するためにリモコンを手に

『きゃああああっつー！？ど、どこ触ってんのはやてー！』

『ええやんか背中洗うついでに、軽いスキンシップや』

『スキンシップって、ちょ、やめっ、そこはらめええええっ!!』
『やわらかっ!?!』。(。どんだけっ!?!プリン!?!マシユマロ
!?!ゼリー!?!いやもつどつ表現したらええんか分からんほどの
のやわらかさ。』

『は、はやしええええっ!!』

『ほわっ!?!お、押さんとい、きやあっ!?!。いたたたつて
ソラ!?!どこに顔突っ込んだるんやあっ!?!う、動か、動かん
といやあん!?!』

『ふごもぐぐ、ふあもごもむっも。!!!(そこはだめ、そこ
はごすっちゃ。!!!(』

『ひやああああああああんん!!!!』

取れなかった。。

「いやちよつと待てえええええ!!!!」

勢い良く立ち上がるとズンズンと風呂場に向かう。そして彼は思っ
た、仮面ライダーは見れなさそうだと

第4話 秘密がばれた!? (後書き)

シヨウ「まったく、君らは何をやっとる……」

ソラ「私悪くない！悪くないもん！！急に胸を揉みだしたはやてが悪いもん！」

シヨウ「確かにそれもそうだぞ、はやて……」

はやて「あれは軽いスキンシップやねん、軽い」

シヨウ「黒子がおまえはっ！てか人の胸のこと叫ぶなよ、近所に聞こえたかも知れないぞ？夜も遅かったから誰も聞いてないと思う……けど」

ソラ「！！(、。、)」

はやて「何を言う！あんなやわらかさに声を上げずにいられるかあっ！ソラの胸のやわらかさを感じたことがないからそんなことが言えるんや！！一回触ってみい！」

シヨウ「いやしないから。そもそもソラがやわらかいことは知ってるよ？ほっぺは引っ張るととんでもなく伸びるし、開脚なんてもう見てるこっちが痛くなるほど開けるんだもん……」

はやて「ほっほっ？これは一度試さなあ？んん？ソラ君？」

ソラ「え？ちょ、何指をうねっねさせてってやめてー！ー！ー！」

シヨウ「カラーーツ！！（僕のポケ立場は・・・（泣）」

幻空「アドバイス&感想、お待ちしています！」 あえて無視

第5話 ジュエルシード（前書き）

とんでもなく遅れましたああーっ！マジすいません！ほんと！なんか色々とこちらの事情が重なってしまって、なかなか書けずにいまして、いやもうマジすいません。遅れてですが、第5話、始まります。

ちなみに最後に少しアンケートがあります。

第5話 ジュエルシード

side

「ふっふん、ふっふん、ふっふっふん」

はやてと暮らし始めてから数日、とある銀髪シスターから生まれた、『お風呂』リズムを口挟みながら、シヨウは商店街を歩いていた。

「いや、今日は魚が安かったから、晩飯はお魚さん中心だね」

商店街での買い物を終えた彼は、買い物袋を肩に担ぎながら、のんびりと歩く。

「刺し身、焼き魚、魚の煮込み、ジュルリッ、フッフ、晩飯のことを考えてたら腹が減ってきたぜい、」

自分の奇妙な行動は周りの人を引かせている事に彼はまったく気付いていない。余談だが、シヨウが出かけたのは昼ご飯（あの、スバル達もびっくりりな量の）を食べ終えてからであり、そのためそれほど時間は経っていない。恐るべし、超大食い野郎……。

「なんかうまいもんでも買って食いますか、えと、お菓子屋はつと……お？」

不意に、何かを感じる。

「・・・・・・・・何で今頃来るかなあ・・・・・・・・？」

不意にシヨウが感じたもの、それは予感。

(予感つってもほとんど感じるのがいやな予感とかなんだからな)

ハア、とため息を着くと、彼は自分の足を予感のした方へと動かす。

「アー、アー、testing testing、聞こえますか
ソラちゃん？」

「テストイングなんかしなくてもいいのに・・・・・・・・聞こえてるよ。どうしたの？」

「いやな予感がした」

「・・・・・・・・」

その言葉だけで十分、なぜなら、シヨウの予感は当たる確率は非常に高い。

その当たる確立は文字通り、百発百中。これはシヨウが生まれた時から持っていたもので、ソラに本気でレアスキルではないのかと疑われた。

「・・・・・・・・分かった、私もすぐ合流するよ」

「GIG、はやてにはありのままのことを言っというて」

「分かった」

はやてにはすでに自分達の事を知られているので、異能の力や厄介事だからと言って、隠れて行動したり、隠し事や嘘をあまりついたりしないようにしている。これはシヨウが提案した事であり、これはシヨウが嘘をつく事が嫌い（そのせいか、嘘をつくのが下手。これも理由）な事と、はやてに色々な抱え込まず、自分達みたいにちゃんと相談する様にとの意味を込めている。この意味を聞いたはやては「そんな事ないもん！」と顔を真っ赤にして叫んでいたが、はやてを巻き込むかのようだが、正確には違い、あくまで相談や連絡などをしたりするぐらいである。例え、火の粉が降りかかったとしても、シヨウがそれを振り払うと断言しているため、はやてはほぼ安全である。

一通り念話を済ますと、予感のしたほうにいく自分の足を速める。
「そこまですごい予感じゃなかったからいいけど、やっぱり予感はやだね」

~~~~~

「ここ、か……」

予感のした場所、公園（なのはがA・Sの第1話で練習していた所）に着くと、あたりを見渡す。

「予感は何かが起こると前もって感じる事だから、そのおかげで、

その何か<sup>が</sup>起きた時や起きる前、最悪、起きた後だったとしても、何か起きてから行くよりはその場に早く来ることが出来るからいいよね……でも、ほんっとなにもないな」

あたりは誰もいないが、いつも通りの静けさであり、特に変わった様子はない。

(特に異常は感じないけど、今回のことは突然起こるのか?……)

少し考えにふけていると、

「シヨウー!」

「ん?おっ、来たかいソラちゃん。」

「うん、どお?なにかあった?」

「うんにゃ、何も無いぜー。たぶんまだ何も起こってないんだろうけど……ッ!」

不意に後ろから何か巨大な力を感じ、すぐさま振り向く。そこにはいつの間にか強い青色の光が発光しており、そこからその巨大な力を感じる。

「これは……魔力!?それも莫大な……どうしてこの世界に!?!」

「へ?これが魔力なの?へへ、こんな感じの力なんだ。」

「うん、そう、ってシヨウ!のんきに言ってる場合じゃないよ!」  
れかなり危険だって事分かってる!？」

「え、別にいいじゃん、すげーじゃん」

「よくないよ!あとすげーじゃんってな……!？」

「?」

色々ツツコンでいたソラの表情が急に驚きの顔に変わったのを見て、その目線の先を見ると……

いかにもホラー映画に出てきそうな人形の巨大バージョンがいた。

「出たあああああああ……!?!?!」

「嘘おおおおおおお……!?!?!」

「イヤ、君が驚いちゃいかんだろがよ。」

「いたっ!」

パソコンとどこからともなく金色の文字で「なにしてんねん」と書かれた緑のスリッパを取り出し、軽くはたく。

「それよりアレなんだい！お化け？お化けだよね主に『付喪神』と  
言われるっ！？」

「うづん、違っよ。」

「冷静に真っ向からの否定ありがトウースツ！？と言っか、なぜ分  
かったあれが付喪神ではないと！？じゃアレなんだい！！」

「いやちよつと、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！だってア「アレ、妖気を感じないもん。  
だからあなたの思っている付喪神とは違っ。そしでアレは多分魔力  
によつて誕生したものだと思っただけど・・・」・・・ボケキ  
ヤラなのに色々とまたツツコミたい所があるけど、あえてこれだけ  
聞いておく・・・なぜ、僕の思っている付喪神とは違っと言  
っ？」

「付喪神って言っても色々いるんだよ？一般的に広まっっている付喪  
神とは違ったのが」

「そうかい、・・・っそんな事してる場合じゃないね・・・！」

ホラードール（たった今ショウウが名称）は既に動き出しており、  
公園から出て行こうとする。幸い今だ踏み潰されたりして壊れたも  
のではないが、このまま行くと、そうなるものが出てくる。さらに

「あのホラードール、町に向かつてない？」

「（ホラードール・・・？）確かに、このままだと町に行くね」

「色々まずいだろ！ここで止めないと！」

「どうするの？キャッチリングとかを使うの？」

「それもアリだけど、ここでこんな大きい奴とやり合つてると一般人が目撃したり、最悪巻き込むかもしれないから、ここから隔離した場所で戦ったほうがいいね」

「それはいいけど、どうやって？」

「こーすんの」

と右腕に光のエネルギーを集め、それを空に放つ。

「メタフィールド！！！」

『メタフィールド』、それはウルトラマンネクサスが作り出す「不連続時空間」、言わば異空間。

ネクサスはこれを使い、スペースビーストの被害から人々を守り、人知れずビーストを撃退していた。

シヨウが使っているのは、それに少し手を加えた、弱体化したのだ。

「ぶつう・・・」

「だいじょうぶ？」

辛そうなシヨウを、ソラが心配そうに顔を覗いてくる。

「大丈夫さ、ただすんごく疲れただけ……」

シヨウの作り出すメタフィールドは、オリジナルとは違い、

- ・ 3分間しか発生できないがない
- ・ 自分の身体そのものではなく、自分の力を使った物
- ・ 敵の能力の低下がない

・ 自分の能力のパワーアップがない

・ 空間の光景は岩山のような場所ではなく、メタフィールドを発生させた空間を写した光景。

とオリジナルとは違う所があり、共通点は、

- ・ 異空間であること
- ・ 現実世界からは不可視

この技はあくまで、オリジナルでも主な理由であった、周りに被害を出さないためのものである。ただし、三分間だけなどのリスクがない代わり、大きな疲労が伴われると言うリスクがある（リスクをなくすために大きな力を一気に使うため、体に不可がかかる事により起きる）。

「ひーこら、きついな……っ」と！

「わっ!」

ホラードールがシヨウ達を踏み潰そうとした様な攻撃を後ろに飛ぶことにより、とっさに避ける。

「危ない危ない、んー、疲労で隙ができちゃうのが傷だな、もう少し鍛えないと」

「その考えは後にして、今はアレをどうにかしないと!」

「そっなんだけどさ。。。」

「?」

「アレー、。。。。やっぱり戦わないといけないかな?」

~~~~~

side???

「ここだよね、ジュエルシードの反応があったのって?」

「うん、そうなんだけど……」

こんにちは！高町なのはです！最近わたしは、魔法少女としてユーノ君の探し物、ジュエルシードを集めています。そしてそのジュエルシードの反応があつた場所に来てみたんですけど……

「何も無いね……」

「なの……」

辺りには何もなーい状態。ジュエルシードが発動したなら、それによつてできた暴走体とかがいるはずなんだけど……

「気のせいだったのかな？……」

「多分、違うと思うよなのは」

「ユーノ君？」

私の隣の下にいるフェレットのユーノ君が話してくる。

「ジュエルシード発動には僕も感じたし、二人そろつて気のせいだったのはおかしいし」

そう言つと、ジッと前の公園を見つめている。

「ん〜、じゃあ結界が何か……？」

「結界だつたら僕達を感じるはずなんだけど……」

「だ、だから！私達に感じさせない結界だとか！？」

必死になって自分の言った意味を説明する。

べ、別に一発で否定されたから必死に言ってるんじゃないんだからね！？

………なんだかアリサちゃんみたいになっちゃったの。

だけどユーノ君は私の話全く無視して前の公園を見つめているの。
つてええっ！？

「ね、ねえ！ユーノ君ちゃんと聞いてるうっ！？」

「ぐええっ！？」

「話を聞いてくれないなんてあんまりだよお！」

「ちょ、な、なのはっ、なのはっ！首閉めてる首閉めてる！」

「ふえ？あああっ！ご、ごめんユーノ君！だいじょうぶ！？」

慌てて掴んでいた手を離す。

「ゲホ、ゴホ、た、たぶん……。」

「うつつ、ごめんね。」

「いや、ボーツとしてた僕も悪いし。」

「でも、さっきのユーノ君変だったよ。なんだか食い入るように公園の方を見てたし」

「うん……。」

そう言うと、また公園の方を食い入るよう見つめる。

「?どうしたの?」

「いや、なんて言うか、妙な感じがするんだよね、あそこ」

と公園の方を指す。

「妙な感じ?」

「うん、何かがあるような気がするんだよね、あそこ」

「何かって、何も無いよあそこ」

「そうなんだけどね……。」

「ただそれだとジュエルシート反応があった事と矛盾ができるし、何かがないとおかしいよね。」

「ちょっと辺りを調べてみるね」

「ふえ？何か見つける事できるの？」

「うん、わかんないけど、試してみる価値はあるよ。」

するとユーノ君の足元から翡翠色の魔方陣が現れる。

(確かに、今の見方じゃ何も見えない、だけど見方を変えれば……
……！)

「見つけたあっ！！」

「にゃあっ！！？」

思わず飛び上がる。

「あ、ごめん」

「だ、だいじょうぶ。そ、それで何か見つかった？」

「うん、僕の妙な感じは当たってた。あそこに異空間が発生してる」

「……へ？異空間？」

素っ頓狂な声を上げる。それもそうだよ、いきなり異空間だなんて言われて、そりゃ上げるよ。

「異空間って……よくそんな勘付いたねユーノ君」

「……………僕も正直驚いてる……………」

ユーノ君の勘は結果魔導師としての？それとも野生のk

「……………なのは、今変なこと考えてなかった？」

「ふえ！？え、う、ううん！そ、ソナナイヨッ！？」

あううつ、ユーノ君がジューツと睨んでくるよ。フェレットだからかわいいはずなのに睨むとすごく怖いんだよ。

「……………まあ、ともかく今はあの異空間内に入ることだね」

「え？それって大丈夫なの？」

転移でいけるかな？と考え込んでいるユーノ君に思わず聞き返す。だって異空間だなんて、別の空間なんでしょ？現実世界（じこ）とは同じだとは限らないし……………

「その点については大丈夫だよ、転移が出来そうなら中も見ることが出来るだろうし」

「あつ、なるほど！」

確かに、先にどんな場所が見れば色々対策できるもんね。

「それじゃあ、早速やってみるよ」

そついうと再びユーノ君の足元に翡翠色の魔方陣が展開される。

がんばれ！ユーノ君！

side ユーノ

調べに入ったのはいいけど、さっきから気になっていたことがある。この異空間は一体だれが……？

魔導師が最初に思い浮かんだけど、もしそうなら、結界を張ればいいし、そもそも魔導師が異空間なんかを作れるものか？と云うよ
りムリだろ、何らかのレアスキルなら話は別だけど……。そして
たらこれはジュエルシードによるものか？けど何でまた異空間な
んか、今まで見てきたのはなんて言うか、怪物見たいのだからなあ、
分からない……。考えても仕方がない、今は調べるのに集中
しよう。ん？なのはが応援してくれてる？……。よっしゃあ
！がんばるか！！

side ソラ

「やっぱ戦わないといけないかな、って当然だよ！何言っちゃって

くれちゃってるの!？」

「言葉がおかしいぜ、ソラちゃん……（僕がポケ担当だよね……）」

急にシヨウがホラードールと戦うのを嫌がりだし、それに対して絶賛混乱中!

「なんでそんな言葉が出てきちゃうの!?色々まずいだろって言うてたのシヨウじゃん!」

「だってアレだよ!?見てみな、あのいかにも映画から出てきましたって感じの恐怖!の人形さん!『ロジャー・ラビット』か『魔法にかけられて』か!そもそも僕はお化けが苦手なんだよ!」

「……うええ……」

「いや確かに同じ霊だけど君が苦手ってわけじゃないからねだからお願いだから泣かないでー!」

うにゃー!と思いつきりシヨウが叫んでいます。だって苦手だって言われるとグサツつとくるよ。

でもそうしてる間にホラードールが辺りを無茶苦茶にし始める。

「オオツ!?メタフィールドの物が!?おいおい、やってくれるね人形ちゃん、って破片こつちに飛んできたあつ!？」

「グスツ、もう!だから戦わないといけないうって言ったのに!」

「すみません……。ハア、やるか……」

シヨウは深いため息をつきながらしぶしぶホラードールの元に向かう。

ヨウ……私が戦えばいいじゃんとは言わないんだね、シヨウ……。

side シヨウ

ハア、僕はお化けが苦手だって言うのに。

「しっかりとどうしてこんなことになってんだい、人形さんよ、」

巨大なホラードールを見上げながら答えないと分かりながらも問いかける。

『ウウウウウウウ……』

ホラードールがゆっくりと手を上げる。

「んっ。」

そして、そのまま僕に振り下ろす。

ドズウウウンッッ!!

大きな音と衝撃波と共に、辺りに砂煙が巻き起こる。

「キヤッ！」

これらを少し離れた所で見ていたソラちゃんの所でさえ、その衝撃波が届く。

「シヨ、シヨウツ！」

ホラードールに押しつぶされたかもしれない僕のことを案じて、必死に名前を叫ぶ。うれしいね。だけど

「ほわ、びっくりした」

まるで何事もなかったかのようにムクッと起き上がる。服や髪などは先ほどの汚れてしまっているが、それ以外はなんともなく、ダメージをまったく負っていない。このダメージを負わなかったのは、ホラードールが僕を押しつぶす前に、僕は『トリロバイトメタル』を使って体を硬化化することにより、もともとの攻撃がただの押しつぶしだけなことあって、ダメージをまったく負わずにすんだのだい！

「もう、シヨウ！びっくりさせないでよ！」

「おりよ？心配してくれるのソラちゃん？うれしいね」

「ウミユツ、」

僕の発言にソラちゃんが赤面する。からかいのつもりで言ったのになんで赤くなるんだ？風邪か？

「まあ、心配後無用！何とかしていきますよ」

むんむん、と腕をブンブン振って余裕を見せてみせる。

『ウウウウウウ』

再び、ホラードールが向かってくる。今度は両手を振り上げ僕を押しつぶそうとする。それを僕は、

『BEAT』

『KICK』

『ライオンビート』、『ローカストキック』を使い、真正面から受け止める。

『!?!?』

「ぐぬっふっふっふ、驚いてるね驚いてるね。悪いけどね、力勝負には自信があるよ、強化してるけど」

この二つは腕力と脚力を強化する技で、組み合わせのコンボとしての強化性はない。実際に仮面ライダーブレイド本編でレンゲルが『モールスクリュー』と『バイトコブラ』を組み合わせるコンボしようとした際、ギャレンに「カードは慎重に選んだ」と指摘されていた。だけど今回の場合はこれでいい。これは力勝負なのだから。ちなみに今のところ僕が勝ってるゼツ！まあ、体格差とかもろもろのせいでまったくそのように見えないが。

「まあ、そろそろいいかなつと！」

『MAGNET』

『バッファローマグネット』を使い、相手の足を思いっきり引く！

『ウウアアアアッ！？』

ドズウウウウウンッッ！！

ホラードールは悲鳴を上げながら後ろに倒れこむ。

「まあ、こんなもんかな？」

「こんなもんかなつて、後ろに倒しただけじゃん」

少し離れた場所にいたソラが近くに来る。

「うん、まあ僕としては『キャッチリング』や『ポーターブリザード』を使って相手の動きを止めようかと思ってるんだけどね」

「あなたってあんまり攻めることをしないよね、攻撃するチャンスはあるのに」

「忘れてもらっちゃ困るねソラちゃん。僕は守護者だよ？攻めより守りのほうが得意なんだ」

「分かってるよ、褒めてるの私は」

アハハ、とソラが笑う。まったくこの子は……。そう思いなが

らも笑みが出る。

「まあともかく、」

キユウイイイイイ

エクストリームがどこからともなく現れ、キングライターをショウに渡して行く(ドラグレッダーのように)。それを手に取ると、スツと『突き』のような構えを取る。

「『ポーターブリザード』を使ってこいつの動きを

．．．」

『リコちゃん、どこお．．．?』

「．．．．．ハイ?」

思わず抜けた声が出てしまう。後ろにいるソラちゃんも同じように、ポカンとしている。そりゃいきなり『ウウウウウ』とか『ウアアア』とかしか言っただけじゃなかった奴が急にちゃんとした言葉で喋りだしたら驚くっしょ。

「なんとこの人形ちゃんと喋れましたよソラちゃん」

「．．．．．なにこれ、あたし聞いてない」

「鳴海亜樹子かい．．．．．まあ、喋れるなら聞けるかな? 暴れる理由を」

と上半身を起き上げたホラーd、じゃなくて人形さんと向き直る。

『アレ・・・暴れてたんじゃない、リコちゃんを探してたの、』

「リコ・・・？それって君の持ち主の名前？」

コクン、と人形さんは頷く。

「なるほどね・・・じゃあどうして辺りのものを壊し始めたの？」

『だって、急に光に包まれて、何って思ってた驚いて、慌ててた』

それが僕達には暴れているように見えたって事ですか。

「了解。最後にだけどなり」なんで私達を襲ってきたの！？」いや人の話し遮らないでっ！？」

なんかいきなりソラちゃんに話し遮られたあっ！？」

『だって、他の子達みたいにいじめてくると思ったから、』

「他の子？」

『公園にいた間、いろんな子がいじめてきた、』

公園にいた間、と言うのはおそらくリコと言う名の少女が人形さんを落として行ってしまっただけの事だろう。そしていろんな子とはこれもおそらく公園で遊んでいた子供達だろう。そしてその子供達が人形さんを面白がって突っついたりいじったりといじめた、ですか。

「えーと、要するに人形さんは『人形さんじゃない、リリ。』オホ

ン、リリ嬢は別に僕たちを傷つける気はなく、あくまで押さえつける気だったと？」

コクン、とりりさんは頷く。そもそもよく考えて見れば最初の踏み潰しも敵意などを感じなかった。まるであれは前に進もうとして下にいた僕達に気付かず歩こうとしていたような……。

と言うことは……。

「なんかマジスンマセン」

土下座、ともかく土下座。最近多いようないが気がするが仕方がない。勘違いとは言えどちらかと言うと、僕の方が悪いような気がする。

「いや、シヨウが謝る必要はないと思うけど……」

それでも罪悪感はある。

「大丈夫、」

「「？」」「」

「お兄ちゃんも同じ勘違いなら、お兄ちゃん悪くない、だから謝る必要はない、それに勘違いの原因を作ったわたしのほうが悪い、」

「めっちゃいい子だよこの子ソラちゃん！なんかもう泣けてくるくらいいい子だよ！！なかなかいいねーぞこっぴつ子！」

「いやあ、私もそう思ってるから……」

もう、リリさんのあまりのいい子さにむっちゃ驚きだよ！こっぴつ子が世の中たくさんいれば少なくとももっと世界も平和だったろうによ。人形だけど。

「それで、……どうするの？」

「へ？」

「いや、へ？じゃなくて。リリをどうするの？」

「あー」

当たり前たくない問題に当たった。確かにこのままっていうのはちよつとまずい、と言つかめちゃくちやまずい。

「どうするのって言われてもどうするべきかね。そもそも原因が分からないからどうしよも」

「原因か……」

ソラちゃんが考え込むポーズで考え込む。

「ねえ、リリ。あなた今の姿になるきかけになりそうなおかしな事とかなかった？」

『うつん、おかしなこと』

「なにかある？」

『特にない、』

「そう……。」

「万事休すか？」

さて、どうしたもんか……。

『青い石が、落ちてきて、それがわたしにふれた瞬間、ピカッってなつたことはおかしなことじゃないし、』

「「それだ」「

いやいや、急に石がピカッって光ったりしたらおかしいからね！？
リリちゃん！？」

「で、その石は？」

「あー、リリ嬢の中だね」

「え？」

おー、驚いてるね。そりゃいきなり体の中だと言われたら驚くよね。ん？どうして分かったんだって？そりゃ多くのウルトラマンが共通に持つ技『透視』で体の中を探ったんだよ。

リリ嬢の言ってた「石」は辺りに見当たらなかったから、もしかしたら〜なんて思ってからだの中を見てみたらビンゴってわけなさ。

「なるほど……」

「うまいアイデアでしょ？」

「変なことに使わなければその『透視』も便利だね……」

「いやちよつとまで、なんで僕が変な事に使う前提になつてんの？
僕はそんなことには使わないよつてそんな目で見えるなああ……！」

ソラちゃんがすつごくいやな目で見てくるんだけど！？いやそり
や時々頭を横切ったりするよ！？だからつてさあ！？、

「そんな事よりどうするの？この子の体の中にあるならどうやって
取り除くの？」

「そ、そんな事つて……」

ソラちゃん、酷すぎますよ……僕には死活問題なんだぞ……
……

「シヨウ、落ち込んでないで早く一緒に考えてよ」

「もういい、もういいよ気にしないから。はあ、どうするも……す
るも、もう考えてあるよ？」

「！」

ソラちゃんがまた驚きの表情を見せる。隣に座っているリリ嬢も
驚いてる。

「なめないで欲しいね、だてに守護者をやってないよ」

胸を張っていう。そりゃそうだ。たった一人の子（？）を救えな
いで守護者なんてやっていけない。護りたいものを全て守るために
この力があって、強くなっただ。この場をどうにかできなきゃ意
味がない。

「とまあ、かつこよく言ってみました」

「なんでこの人はこうなのかな・・・？」

なんでだつて？そりゃ僕がポケキャラだからさ！サムズアップ！！

『でも、』

「うん？」

「？」

リリ嬢が不安な声を上げる。

『リコちゃんを、見つけられない、』

「それに関しては心配後無用。」

『ふえ？』

「君を元に戻したら、僕達が君のご主人を探してあげるから。」

笑いながら言う。リリ嬢はポカンとし、ソラちゃんはぼーぜんと
している。何？意外すぎたか？

「まったたく、」

ソラちゃんが両手を腰に当てながら呟いてくる。

「勝手に決めて、勝手に巻き込むんだからあなたは」

「僕が言わなかったら君が言ってたでしよう？」

「まあ、そうだけど・・・」

ブーと顔を膨らませながら言ってくる。ブーたれソラちゃんもかわゆす。ちゃんと撮ってるかーエクストリームー。

「ほんじゃまあ、いくぜ？」

手をまるで水を汲むように胸元まで動かし、それと同時に光が手の内に集まる。

「ルナエキストラクト」

そして集まった光をスウツとリリ嬢に放つ。

その光は優しくリリを包み、そして、

「・・・元に、戻ったね」

「だね」

ただの人形に戻り、地面に落ちているリリに視線を向ける。

「しっかしリリ嬢をあんな姿に変えた石ってのは一体・・・？元の

姿はさっきの姿みたいに酷くないじゃん。ちょっと汚れてるけど」

そう言い、空中に浮かんでいる青い石に目を向ける。

「ジュエルシード、なるほどだからなの……」

「ジュエ、なんじゃそれ？」

「『ジュエルシード』。強大な魔力の結晶で、周囲の生物や物などが抱いた願望、いわば願いをかなえる力を持つてるの。」

「へえ、それって結構いい物じゃん」だけど力の発現が不安定で、簡単に暴走しやすい代物。『ロストロギア』って呼ばれてる相当危険なものだよ、さっきのリリの姿もコレが暴走したものだと思う……前言撤回、なんでそんなあつぶないものがこんなご近所に！？」

はやての家数分もありやすく着くぞ！？

「わかんない、こういうのはこの世界にはなくて、別次元の世界にあるはずなのに……一体どうして……？」

「ムムム、なんか色々裏がありそうですねこのやつかいモン。ただど危険なら、」

「？」

「封印すべきじゃ？」

ソラちゃんを見て確認を取る。

「できるよ。たぶんクウガの力でも」

「そうと決まれば!」

バツ、つと両手を左右に広げ、右足を前に出す。そこから封印エネルギーの炎が現れる。それを足に纏い、一気に走り出し……!

「マイティイイーーーーキイイツクーーーー!!」

放つつっ!!

マイティキックはジュエルシードに当たり、封印の文字が刻まれる。するとさっきまでジュエルシードから感じられていた魔力は嘘のように消え、コトンツと地面に落ちる。

「封印完了」

「うん、これで安心かな?」

「安心かな?」

安心だよ、100%とは言えないけど。そう思っているとソラちゃんはまだ考え込む。

「……やっぱ気になる?」

「うん」

無理もないよね、この世界は『魔法』なんてものは存在しないのにこの世界にあつたら。

「考えられるのは何者かがこの世界にジュエルシードを持ってきたことかなんだけど・・・」

「『魔術師』とやら、でしょ？何でこの世界に・・・」

ん〜、と二人で考えにふけつてると。

「あ、あのー！」

「ん？」

「ヨウ？」

「そのジュエルシード、渡して頂けませんか!？」

白い服のコスプレ少女が、頭を下げてくださいました。

第5話 ジュエルシード（後書き）

小説のナレーションの書き方について悩んでまして、それについて読者の方々にアンケートを行って決めようと思います。アンケート覧はこちら

- 1、第三者視点、すなわち地の文を使うか
 - 2、各キャラクターの視点を使うか
 - 3、1と2両方を使うか（今回使ったように）
- アンケート期間は約一ヶ月です。よろしく願います。

それから文章の書き方などのアドバイスもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483v/>

魔法少女リリカルなのは ~Destiny's Joker~

2011年10月10日03時12分発行